

土 淨

號 月 三

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一冊二日發行)
昭和十八年二月廿日印刷刷本・昭和十八年三月

第九卷 第三號



金

陸海軍
病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆ 全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆ 一口一圓五十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆ 毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆ 個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆ 御送金は浄土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

知恩院門跡
淨土宗管長
法增上寺主

郁芳隨圓貌下序・増谷文雄著
大島徹水臺下

新刊

行誠上人

◇近世不世出の高僧、行誠上人の全傳成る◇

謹嚴にしてしかも脱俗洒々たる上人の風格は最大の魅力！上人の言行がそのまゝ信仰である。

學識に德行に一世に秀でた上人によつて、廢佛毀釋にあつた佛教界が指導された。更にまた上人の和歌、詩、書、畫はみな一流一家をなしてゐた。文の簡麗なる、筆の猷美なる他に求むべくもない。上人に傾倒する著者が渾身描き出した興味つきざる近來の名著。

B6版二百三十頁
定價一圓五十錢
送料十二錢

言説・行業は直ちに讀者を感化せずにおかない！！

内容

口繪・序文

一、學僧としての行誠上人

上人はかく學び給ふた・學問に於ける主張と業績

二、高德を偲びて

上人の風格のこと・芳躅をたどりて・遺書につきて

三、御一新の渦中に立ちて

廢佛毀釋の真相につきて・肉食妻帶とたたかふ・毅然として識見を持す

四、上人の文藻に就きて

上人の短歌に就きて・上人の紀行につきて・上人の詩と書と畫につきて

附 錄

著作解説

年譜

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京芝區明照會館
東京芝區明照會館
番七八一二

淨土三月號 目次

表紙・扉・目次カット……………鈴木金平

日泰文化協定と佛教……………吉田孝一(四)

聖典講義 國家に供養する……………大野法道(六)

木枯らしの夜……………吉田絃二郎(八)

西方寺の話……………上司小劍(三)

信仰の花開く……………市橋善之助(三)

和宮精神昂揚の秋……………澁澤敬三(六)

欲燒其筆硯……………小西和(四)

信仰相談……………中村辨康(三)

日蓮教義の三田富士吉氏に寄す……………(六)

比島風景 カルマタに乗つて……………永井和(三)

歌俳漫畫三
壇……岩野喜久代選……(三)
壇……太田耳動子選……(四)
題……漫畫協團……(六)
ト傳と跳ね馬……………(二)
質素な正則の妻……………(九)
昔咄集……………(三)

法語解説 人間の宗教として……………中村辨康(四)

編輯 後記……………(四九)



淨土 三月 號

ときんく別時の念佛を修して、心をも身をも
はげましとゝのへすむべき也。日々に六萬
遍をとなふればとて、たゞ在もいはれたる事
にてはあれども、人の心さまは、いたく目も
なれ耳もなれぬれば、いそくとすむる心
もなく、あけくれ心いそがしき様にてのみ、
疏略になりゆく也。その心をためなをさん料
に、時々別時の念佛はすべき也。

法然上人御法語





日泰文化協定と佛教

文部省宗教課長

吉田孝一

舊臘日泰攻守同盟成立一周年の記念日に當り、更に日泰文化協定の締結を見たことは兩國の親善關係をいよいよ深化すると共に大東亞新文化の創造發展に寄與するところ多大なるを信じ洵に慶賀に堪へないところである。而して同協定は、大東亞に於ける國家間に結ばれた最初のものであるといふことばかりでなく、協定の中に新に宗教に關する規定をした點に重要な意義を持つものである。即ち第六條に「締約國ハ兩國間ノ文化關係ノ増進ニ寄與スベシト認ムル……宗教家ノ活動ヲ獎勵シ且此等ノ者ヲ交換、派遣又ハ招聘スルニ努ムベシ」とあるのがそれである。

かくの如く文化協定中に宗教を取り入れたことは、これまで世界に存在した數多くの文化協定の何れにも見られないところの劃期的なことであつて、實に同協定を以て嚆矢となすものである。而して今回の文化協定に於て宗教が加へられたことは宗教殊に佛教が日泰兩國の文化の上に極めて重要な地位を占めてをり、從つて又大東亞の建設に於て佛教が如何に重大な

る使命と役割を荷ふてゐるかを如實に示すものに外ならぬのである。依つて兩國の佛教が眞によく同協定所期の活動をなすならば、ただに兩國の友好關係の増進を資するのみならず、よく兩國の文運は昌隆となり、延いては東亞文化の興隆を招來し、東亞諸民族の自體と繁榮に貢獻するところ必ずや大なるものと確信するものである。然らばこの協定によつてわが國の佛教と固く結ばれるに至つた泰國の佛教は如何なるものであるか、同國の佛教事情についていさゝか瞥見したいと思ふ。

泰國革命後の憲法(一九三二年)はその第四條に於て「國民ハ國民タルノ義務ニ背カズ秩序又ハ風紀ヲ紊サザル限リ自己ノ欲スル宗教及信條ヲ奉ジ自己ノ信仰ニ遵由スル禮拜ノ形式ヲ行フコトノ完全ナル自由ヲ有ス」と規定して形式的には信教の自由を認めてゐるのであるが、それと同時に同第十三條は「國王ハ佛教ヲ信奉スベシ」と規定して、國王に佛教信奉の義務あることを明にしてゐるのであつて其の他諸般の實情から考へて泰國は事實上依然佛教國であるといふことが出来る。實際國王は代々熱心なる佛教信者であるし、一方國民も亦總人口一千五百万人の内九割以上まが佛教信者なのである。更に最近の統計によれば寺院は

約一萬八千、僧侶は三、四十萬に達し、これを總人口に比較すれば寺院は八二〇人に一寺あり、僧侶は七十七人に一人の割となつてゐる。従つて如何なる山間僻地と雖も必ず寺塔が聳えて居り、首都バンコックの如きは壯麗を以て開える王宮内のワット・ブラケオを初めとして七百餘の寺院が輪奐の美を競ふてゐる。但し右の僧侶數の餘りにも多いのは、この國の風習として必ず一週間乃至三ヶ月間出家して僧團生活を送ることになつてゐるが、その短期の僧侶をも含めた數であるからである。泰國の青年はすべてかく好個の修練の機會が與へられ、これが國民精神の陶冶の上に多大の寄與をなしてきたのである。泰國が「國民皆僧の國」と呼ばれてゐるのもこんな風習があるためである。

泰國の國民教育は佛教主義を以て一貫されてゐる。學校の七、八割は寺院に附屬して設けられ、教師も僧侶が甚だ多い。講堂には佛壇があり、その他家庭はもとより公の集會所、法廷、兵舎、船舶等にも佛壇や佛像が安置され、かの日泰攻守同盟が王宮寺院ワット・ブラケオ内のエメラルド佛像の前で調印されたやうに國家的儀式にはすべて佛教儀禮を伴ふのである。泰國の國民精神の涵養、陶冶は國是として佛教によつて行はれてゐるのである。

かうした佛教精神の滲透は國民生活のあらゆる分野に見られる。例へば日常の挨拶は合掌を以て交はされ、「黄衣の國」といはれる通り早朝の市街を跣足で托鉢する僧侶の群と、これに敬虔な態度で供養する市民の姿等はよく知られてゐる通りである。白靑赤の泰國々族は、中心の青色が國王を、白色が佛陀を、赤色が國民を表徴するといはれてゐる。

次に佛教の内容はといふと、一言にして云へば「戒律佛教」であるといふことが出来る。沙彌は十戒、比丘は二百二十七戒といふ制法が嚴重に守られてゐる。本尊は釋迦一佛であつて、信仰内容や教義に所謂宗派の對立なく、ただ戒律把持の上で嚴格派と寛大派ともいふべき二派があるに止まる。この點ではわが國の佛教が「日本國一向大乘相應之地」なる傳統的理念によつて今日に及び、その教理、信仰に於て各々その授る所を發揮して幾多の宗派をなしてゐるのと比較して非常な相異がある。

しかしながら兩國に於て佛教がよく各々の國民性に馴化し、國民精神、國民文化の重要な要素となり、それぞれ國家の發展に著大な寄與をなし來つた點に於ては異なるところはないのである。

それはともあれ、日泰兩國の佛教はその内容に於て相當の相違があるのであつて、これを今回の協定の趣旨に勘へ、特に敎家の注意を促したいことは、兩國の佛教が相互にその特質を尊重し、理解し合ふといふことである。本協定の前文に「兩國文化ハ本然ハ特質ヲ相互ニ尊重シツツ緊密ナル協力ノ下ニ兩國間ノ文化關係ヲ更ニ増進セシメンコトヲ欲シ……」とあるのは實に右の趣意に外ならないのである。

而してかくの如きは單に宗教のみの問題ではなく、文化の各部門についての根本精神ではあるが、佛教が兩國に於て何れも重要な地位を占めてゐるだけに、この點についての十分なる留意を必要とするのである。互ひに相手國の宗教をよく研究し理解して、その特質はこれを十二分に尊重し、その上で宗教を通じて兩國の親善融和の實をあげるやうに心懸けることが極めて肝要である。

前に述べたやうに日泰文化協定は、兩國宗教家の活動の獎勵、交換、派遣、招聘等について規定してゐるが、由來、日泰兩國の交渉は江戸時代初期に於てすでに甚だ緊密であつた。たとへ幾ばくもなくして鎖國令によりその交渉は長く絶ち切られたとはいへ、明治初年再び兩國の修交は

開かれ、爾來逐年友好的關係を深めて以て今日の如きに至つたのである。

その間佛教上では明治三十三年に當時の暹羅國王室より日本佛教徒に佛舍利を寄贈せられたことがあり、この佛舍利を奉安するため名古屋に日蓮寺——今の日泰寺が建設せられ、同寺は爾後兩國々民の篤き崇敬の的となつてゐる。また兩國佛教徒の親善使節や典籍の交換等について云つても見るべきものが尠くなかつたのである。然るに今や日泰文化協定が成るに及んで、兩國の佛教は各々その本然の特質を尊重しつついよいよ相互の認識と理解とを深めんとしつつある。

今後兩國佛教徒の間になさるべき交渉については兩國の高僧・碩學の招聘・交驛、佛教學徒の交換・留學、佛教事情乃至佛教文化の紹介、教理・典籍の研究・翻譯等々あければ兩國の教界の將來はまことに多事多彩といふべきである。

私は日泰兩國の佛教徒がお互にそれぞれの佛教文化の本質に對する理解を一段と深められ、完全なる提携協力の下に本協定の眞の目的達成に努められんことを希求して止まないものである。

鼻病に評判の良い

ビノサン療法

鼻(の)病に悩まされ今迄色々手當して居るが治らず、絶えず頭痛頭重、鼻塞り等に苦しみ、始終鼻汁が出て頭はぼんやりし記憶力の判斷力が減退して困ると云ふ方へ是非お奨めしたいのは、手間ひまいらず極めて簡單で、や、めの早いビノサン療法です。

ビノサンは從來の内服薬や洗滌等とは全く異なる一風變つた粉薬で、添付の新案吸薬器で薬を吸ひ込めば、鼻腔内深く悪い部分にまで塗布浸透され、直接病因に働きかける結果、使用一回毎にこんな汚ない鼻汁が瀾山溜つて居たのか自分でも吃驚する程出て来て、鼻は氣持よく通り、頭もハツキリ軽くなつて、夜分等も氣持よく安眠出来る等快い藥效が現はれ快癒を早めます。従つてビノサン療法は近時どこへ行つても評判です。

無代進呈

ビノサンは、
借用と效果を
試つてゐる頃
です。『鼻より實録主編』で如何に良
い藥であるかをお試し願ふて居りま
す。今迄ビノサン療法を御實驗なさ
れた方々の中には、效果を實録の餘
りそれからそれへと俗に『鼻出し薬』
だと思ふをもつて肯傳へて下さる有
様です。詳しい説明書は左記本家に

「淨土」で見たと記入御申込次第と
なす様に無代で郵送申上げます。
諸價は大衆の廉價で(二箇十日發)
五箇(三十日發)九箇(二ヶ月發)各新
案吸薬器付(送料内地十圓海外四十
二圓です)。本家の東京市浅草區經前
三丁目五ノ八小判屋(振替東京二〇
二番)へ御註文下さい。



木枯らしの夜

吉田 絃 二 郎

いろいろな哲學的或は宗教的な概念を持つた人たちがあつた。やゝもすればその人たちは、その概念を把持することによつて、人生を持ち、人生を正しく生き得たかに感じてゐる。しかしそのやうな生き方は何の力をも持つてはゐない。

わたくしは學生時代に波多野精一博士の哲學史をただ一時間だけ聞いたことがある。それはわたくしが軍隊から學園に歸つたのが或る年の一月であり、久し振りで出席したのが波多野博士の哲學史の時間であり、博士はその講義後間もなく京都大學へ行つてしまはれたから、博士の講義はたゞ一時間だけ聞いたわけである。そのをり聞いたのはスピノーザの哲學であつたが、わたくしの頭には三十幾年の今日なほ、はつきりとあの一時間の講義の印象が錨りつけられてゐる。そ

の後わたくしは一ケ年の間他の教授の哲學史の講義を聞いたが、それはほとんど何等の印象も残してはゐない。

波多野博士の哲學史の講義は概念ではなく、博士自身の信念であり、信仰となり、生活そのものとなつてゐたところに他を動かす力を持つてゐたのであらう。近ごろ大學院問題が云々されてゐるが、大學院としては研學といふことが主になることはいふまでもないが、人を動かす力を持つた學者を作り出すことを忘れてはならぬ。五百人千人の概念把持の教授を作り出すことよりもたゞ一人の信の學者、力の學者を作り出すことはさらに肝要である。

×

カントがどんなことを説いたか、ヘーゲルがどんな



ことを主張したかといふことよりも、カントは人間として如何に生きたか、ヘーゲルは如何なる生活を遂げたかといふことが、一層深くわたくしたちの魂に訴へるものを持つてゐる。

白隠禪師がどんな禪を持つてをられたかといふことは一般の人には理解できないことであるかも知れない。しかし禪師が原の宿の在家を廻り、臺所先に捨てられてある餓えたる飯を拾ひ、敗醬をいたゞいて生きてをられた一事を聞いたゞけでも、わたくしたちの心に迫るものを感じる。

人を動かすものは概念ではない。人を動かすものは人である。

×

わたくしの知つてゐる令嬢が去年結婚をして寒い外地へ赴いた。このころ初産をして、零下二十度の氷雪の中で孩兒を育てゐるといふ消息があつた。早産だつたために三日三晩も寝ないで死の一步手前にある孩兒のみとりをしたことや、生まれてはじめて親の恩といふものがわかつたといふことも書いてあつた。病院に通ふ電車通りに一人の男乞丐が立つてゐた。見れば

自分の赤ちやんと同じところに生まれたらしい赤ん坊を抱いてゐる。

自分の赤ん坊と乞丐の赤ん坊と裸にしたら何のちがひもないわけである。それなのに一方は温かな部屋に寝かされてゐる。一方は親の不心得もあるにちがひないが零下二十度の寒風にさらされてゐる。

乞丐の親は孩兒を寒風にさらして人の同情を喚び起こすといふ考かも知れないが、ともかく子供は可哀想である。

「わたくしは近所の店に飛び込んで行つて、その赤ちやんのために毛の帽子とちやん／＼を買つて、乞丐にやつて、逃げて來ました」といふ手紙の文句をわたくしはじつとくりかへして讀んだ。

若い人のころは何處にゐても、如何なる場合にも美しい。このやうな心の底から何のわだかまりもなく湧いて來る情こそまことの菩薩の心とでもいふべきものであらう。

またその手紙にはこんなことも書いてあつた。「生まれて間もない赤ん坊に注射の針を刺すのを見てゐると、どんなに痛い食鹽注射でも何でも自分が代つてい



いものなら、いくらでも注射をしてもらひませうにも思ひました。そして赤ん坊が注射の痛さに小さな手足をひくひくと痙攣させるたんびに、自分の肉を分けた赤ちゃんだといふことを一層痛切に感じるのでした。

わたくしはこの手紙を讀んでゐる間に、一人の若い母となつたかの女の姿を描いてゐた。それはわたくしたち男性が生涯どんなに苦しんでも、探しても到底覗き得ない人生の深所に詣り得た刹那の尊い至高の人間の姿である。哲學者も宗教學者も覗き得ない人間生の一角を若い母は掴み得たのであつた。尊いかな人生に苦しみ生きる者の生活！

かの女の手紙はさらにつゞく。

「わたくしたちは一日も早く内地へ轉任のできる日を待つてゐました。わたくしたちの希望は達せられることになりました。一月内地へ轉任のことに決められました。しかしわたくしたちは轉任のことはお断りしました。零下二十度の地ではありますが、こゝにはわたくしの乏しい母乳に代る牛乳が豊富にあります。ですから赤ちゃんにせめて牛乳だけでも充分飲ましてやり

たいと思ひますので、赤ん坊が大きくなるまでこの土地に留まることに致しました。」

女は弱いかも知れない。しかし母は強く賢い。零下二十度の外地に嬰兒を抱きつゝ夜を徹して、風を聴きつゝあるであらう若い母の姿は菩薩そのものである。

×

けふは雨が止むと同時に冷たい風が吹き荒れて來たが夜になつてもなかく止まない。静かな夜の雨はなつかしいが、風の聲はやゝ耐へがたく思ふことがある。眞夜中に夢を破られるれば、たゞ風の聲のみが後から後からと耳について、なかく眠れない。いろいろな事を思ひわづらう。凡愚の悲しさである。

かういふ場合に、何も思ふことなく、すやすやとふたゝび眠りに就くだけの悟りができないものであらうか。と、自分の心をさげすみたい氣にもなる。わたくしの枕もとから五六歩の縁の下には、寒い夜にも主人の寢所を離れまいとおもふところからか、一匹の犬が寝てゐる。わたくし一人を頼りに生きてゐる一匹の犬すらが執着ともなる。風の音を聞きつゝ眠られぬ夜は凡夫に取つては試験でもある。



しかし、風もなつかしいものである。

やがて庭の鶯が鳴き、花の咲くころともなれば、

またの冬までは、風を聴くこともあるまいと思へば、

風の夜もなつかしい。

風よ吹け、風よ高鳴きしてわが窓を過ぎよ。

かく心をきめてかゝると、一個の悟りに似たものを感じる。

凡夫の悟りであらう。

心の底の底から、底の底に徹して人生の寂びを、孤独を思惟することのできるのも、風の夜である。かく

考へると、風の夜こそこの上もなく、ありがたい夜である。

人間は眠つてゐる間も、悠久について、三世について思惟しなければならぬ。と、いふことを、風はさとしてゐるやうだ。

風の夜を恐れまい。眼さむるまゝに眼さめ、思ひわづらうまゝに思ひわづらふて夜明けを待たう。一切はあなたまかせにして。

風よ吹け、荒べ、わたくしの小さな悟りのために。

ト傳と跳ね馬

無手勝流で有名なト傳の弟子の中で、特に

腕の優れた者があつた。この弟子が或る時道の

傍に繫がれてゐた馬の後を通ると、馬が驚

いて跳ねたのでひらりと飛びのいて體をか

した。これを見てゐた人達はさすがはト傳の

高弟だと賞めた。

ところがト傳はこの話を聞いて、その弟子

のことを思つてゐた程の者でないと貶した。

弟子たちは大いに不審がり、それなら師を試

してみようといふことになつた。先づト傳を弟子の家に招待し、その途中に類のない程の跳ね馬を繫いでおいた。

やがてト傳がその道を歩いてきた。例の馬

が道に繫いであるのをみると、たとへ馬が跳

ねても決して脚がとどかぬ後の方を急ぎ足で

通りぬけてしまつた。どんな早業が見られる

かと楽しみにしてゐた弟子たちは案に相違し

てがっかりしてしまつた。後になつて弟子た

ちがそのことをト傳に話すと、かう答へて云

つた。

馬が跳ねたので飛びのいたのは、一見、業が優れてゐるやうであつて實はさうでない。馬はもとより跳ねる性質を持つてゐるの

である。それを忘れて馬のすぐ後を通るのは

怠慢であり、心の油断である。飛びのいて無

事だつたのは時の仕合せといふもので、若し

飛びのき損じたら何うするのか。剣道も時に

よつて下手が上手に勝つことがある。勝てば

必ず上手とは云へない。それよりただ先を先

をと心がけて何事にも油断や怠慢のないのが

よろしい。



西方寺の話

上司 小 剣

私は青丹よし奈良の古都に生れたが、小學校時代を、大阪の北六里、Tといふ寒村にくらしたので、山川の流れの美しいその摺り鉢の底のやうな村がいまもなつかしい。その村は狡猾な卑しい人間の多い、いやなところだが、人間を離れて、自然の風物が、幼少の私を育ててくれたとも言へよう。小人と俗物ばかりのなかにも、たまには親切なやさしい男女もあり、T子といふそのころ村にただ一軒の小料理家の娘なんぞ、いまでも音信を絶た

ないで、關西に旅行するたび、忙しいなかをくり合はして、T子母子に逢ふのを楽しみにしてゐる。もう疾くに料理家を止めたT子だが、今年八十幾つその母とともに、むかし取つた杵柄とでも言はうか、たまに訪ねる私にもてなしてくれる田舎料理の庖丁には、やはりどこか垢ぬけがしたところがある。庖丁の垢ぬけもをかしいが、一つはその情味が、東京あたりの高級料理店にもないものがあるのだ。

この八十幾つになる老婆は、私の幼時私をおんぶして守りをしたといふのを、逢ふたびに自慢話のやうにして私に聞かせるのである。三歳かせいぜい四歳ぐらゐのときのこと、もとより私にその記憶がたしかにある筈はないけれど、口癖のやうにさう言はれてみると、なんだか、娘ざかりであつたこの老婆の背中で、私は持たされた蜜柑を轉がしたことがあるやうな氣もするのである。〃われ三歳にして母常磐の懷に抱かれ……と叫んで、彌平兵衛宗清の眉間の黒子をおぼえてゐた義綱の牛若丸の頭のよさが偲ばれる。この老婆の娘T子が、こしもう五十幾つ、この子の十三歳のころまで、私はこの村にゐて、T子を妹のやうに可愛がつてゐたので、いまでも逢へば實の妹のやうな氣がす

るのである。私は一人息子で、兄弟姉妹がない。

x

明けてもう一昨年になるが、私は例の忙がしい關西旅行の閑を偷んで、滞在中の甲子園ホテルから、池田の里（いまは大阪府池田市だが）に小林一三氏の本邸を訪ねて、有名なお茶室大小庵で、薄茶の接待にあづかり、息子さんのお嫁さんの僂れたおてまへに感服しつつ、辭して更らに北一里、T村にT子の家を訪ふたが、生憎留守で、戸が閉まつてゐた。

特志寄附芳名

本會活動資金にと左記の通り特志寄附下さ

れました。

五 圓

神戸市林田區寺池町一ノ八四

中 本 千 代 殿

x

近所の人に傳言を頼んで、ホテルへ歸ると、翌朝になつて、T子からの電話が、朝寢の夢を驚かした。ベッドの上から手を伸ばして卓上の受話機を耳にあてると『きのふは、しつれいしました。これからおたづねします』といふ聞き馴れた聲である。山奥の寒村でも、電話に電車に、よく開けてゐて、東京の近在よりは便利なほどだが、直徑にしても四里ばかりの距離があつて、電車も二度乗りかへを要するから、T村よりここまでくるには、早くとも一時間半を要するであらうと思つて、私はゆつくり、ひとりですを立って入浴し、支度を整へて、食堂へ行き、室へ歸つて新聞を見てゐると、卓上電話は『お年寄りの御婦人の御面會でございます。ロビーにお待ちです』と、帳場の少女の聲である。室へ案内するやうに命じて、しばらくすると、ノックの音がした。

丁度三年目に逢ふT子の母は、いつの間にかスツカリ、比丘尼姿になつて、頭巾を被り、念珠を手にしてゐる。年來の懸意つくとして、改まつた挨拶もなく『どんどろ大師の妙珍さんや』とばかり、椅子に腰をおろすなり、頭巾を脱ぐと、剃り立ての頭が、ピカピカ光つてゐる。『蒼々と』と言ひたいところだが、さすがに年のせゐで、さうは行かぬがしかし、テツペンがだいぶ禿けてゐるだけで周圍には白髪にもさうなぬ黒い毛が、芽を出しかけてゐる『今年も善光寺さんへまゐりましたでえ。……名古屋で乗りかへやよつて、東京は通りまへん。坊んさん』とこへ寄れまへん』と、にこにこしてゐる。ここに『坊んさん』といふのは私のことである。幼いころ呼んだのをそのままに、この年になつて、まだ『坊んさん』はおそれるが、いくら止めても口癖になつて、つひ出るのである。知つてゐる人には説明するに及ばぬが、大阪界隈では、『坊んさん』といふ言葉に、三

つの對象がある。その一つはT子の母が私に向つて呼ぶ「坊んさん」で次ぎは、お寺の「坊んさん」すなはち東京でいふ「坊さん」のこと。そのつぎは商家の丁稚、東京でいふ「小僧」のこと。そのいづれもが、アクセントの使ひわけによつて、互ひに誤ることはないので、それを文字で書きわけるのは困難だ。ほんの少しの口さきの技巧によるのであつて、詰めたり、引ツ張つたりする記號をどう工夫しても、正しくは書きあらはせない。やはり文字よりも口舌の方が、かういふ場合ひには適切である。

坊んさん……坊んち……坊んこはん……

T子の母が私を呼ぶのは、この三とほりで、いづれも同じ意味だが、最後の「坊んこはん」には多分の愛稱を含んでゐるが、さすがに近來はこれを用ゐないで「坊んさん」一點張り、「先生」とも、「旦那はん」とも呼んでくれない。當年現在の私よりもズツと若かつた私の父に對しては、かならず「旦那はん」と彼女が呼んでゐたのであるが……しかし、T子に至つては、私が十六七歳のころ、あの寒村で小學校の代用教員をしたとき、一年生の彼女を教へたことがあるので、そのときの思ひ出を顧めて、いまでも私を「先生」と呼ぶのが、誰れの耳にも怪しくは響かぬけれど、彼女の母が、往來、ホテルの廊下、料理家の座敷のいづれを問はず、持ち前の高聲で「坊んさん」には恐縮することがある。聲の若いときから高いが耳も目も達者で、足も丈夫、いささかの老衰をも見せてゐない。おそらく彼女は、私よりもまたT子よりも長命をするであらう。

T子の母はいま全く信仰に生きて、清らかな日常を送つてゐる。T子もその薫陶を受けてか、だいぶおまゐりをするらしいが、とてもその母の篤信には及ばないらしい。もちろん信仰は彼女たちの家の傳統で、もう三十餘年も前、T子は私を引ツ張つて、河内の國に名高い野崎の觀音へおまゐりさせたこともあ

る。お染久松の戯曲で聞えたこの寺を背景にして、當時の情趣を、むかし私は『東光院』と題した短篇に書いたことがあり、それは『お光壯吉』といふ長編の一部を成してゐる。

x

T子の家は代々淨土宗である。善光寺へも永平寺でも熱心に參詣はするが、家の宗旨は淨土である。先年彼女が上京して私の家へ泊つたとき、鶴見の總持寺池上の本門寺へ連れて行つたが、つひうつかりして、淨土宗の大本山増上寺へも奥澤の九品佛へも案内しなかつたことを、いまだに残念だと思つてゐる。九品佛は、私の住宅の近所といへば近所で、電車に乗れば二十分はかからないで行けるのである。

T子の村には淨土宗の寺が三軒もある。T子の旦那寺は西方寺といつて、そのころの住職はおとなしい薄茶石のある古澤放翁といふ

五十がらみの和尚で、いささか年土かとも思はれる梵妻と二人で、小綺麗に儉しくくらしをた。この寺は私の父が奈良から出かけて神職をしてゐた荒廢し切つた大きな神社の一部分に接して、二丁四面の神社境内の出丸の、やうになつた小さい寺で、本堂と庫裡とだけ、鐘樓などは無い寺であつた。いまとちがつて、神社が神主の私有物のやうになつてゐた時代として、私の育つた神社は荒れ放題に荒れ、方々雨漏りがして、神輿庫と稱する雄具入れの倉庫なんぞ、雨漏りのため自然に崩壞してしまひ、その跡片付けさへできない始末であつた。しかし、いまから考へると、かう荒廢して、境内には雑草離々たる風景もまた面白く、却つて神聖さをすら感ぜしむるもので、山奥のお宮やお寺のいやに工面がよささうに、成金式の下品さであちこちピカピカしたのにくらべて、また一種の趣きを感じるものであつた。それはさておき、私もその浄土宗の西方寺といふのへ、ときどき遊びに行つ

ては、和尚と梵妻とが長火鉢を挟んで差し向ひに煙草を吸つたり、茶を飲んだりしてゐるのを見たが、その本堂が、小さいながらも、妙に風情のある建物であるのを子供心に美しく眺めたのであつた。私の父の死ぬまで奉職した神社は、社殿が大きく境内がこんな寒村には廣すぎるほど廣かつたが、建築物の美術的價值は零で、たしか徳川家綱が寛文年間に附近の諸侯に命じて建てさせたものだといふが、言はば間に合せ建築で、今日に至るも、特別保護建造物たるには値ひしないやうである。さうした藝術的鑑識がもとより子供の私にあつたわけではないけれど、なんとなく、そんな感じがしてゐたのは、三つ子の魂魄にも、後年の職業からくる觀察眼が、どこなくあつたものか。境内は廣く、社殿は大きくとも、社格の低いのは、祭神が格別國家に大功勞のあつたわけではないことを、やや長じて日本外史を教はつたときに知つた。人臣を祀つたのだから、もちろん官國幣社にはなれ

ない。別格官幣といふところだが、それはむづかしいと、そのころ父に聞かされて、子供心にもさう思つたのであつた。因みに臣下を祀つて官國幣社になつたのは、菅原道真と武内宿禰とだけである。菅公は太宰府も北野も官幣中社。武内宿禰は因幡の宇倍神社の國幣中社である。

また餘談になつたが、その浄土宗西方寺で催される年中行事のなかで、盆の施餓鬼と、秋も季の十夜とは甚だ賑かで參詣人が多かつた。施餓鬼は釋迦在世のころ、阿難の創めたものと聞が、この西方寺でもすぐ近くの法泉寺と龍門寺との住僧が手傳ひに来て、三人でおおそかに讀經してゐた姿が、いまもありあり眼の底にのこつてゐる。十夜には萩の餅を作る慣はして、村の家々で思ひ思ひに大きなや小さいのをこしらへた。それを作らないで、方々から食べ切れぬほど貰ふのは、私の家と西方寺とであつたらしい。丁手が重箱に入れて持つてくるのが、小さくて、餓が多

靜寛院宮様御童形様人形



大東亞戦争
を勝ち抜く
爲めに

今や殉國の婦徳

和宮精神昂揚の秋

子爵 澁澤 敬三

國家の興隆東亞の確立を目指しての大東亞戦争こそは正しく我が日本帝國前古未曾有の大事業であると共に前途には幾多の困難がよこたわつて居ります。この大事業完遂の爲には前線銃後總力を擧げてこの困難を克服せねばならぬことは申すまでもありません。それ

につけても深く思ひを致さねばならぬことは銃後一般の心構へ取り分け婦人の覺悟が大切であることであります。古人も云へる如く修身齊家ありて治國平天下の大道も開かるゝのであり、米英撃滅の基礎もこゝにあるのであります。そも／＼日本の家なるものは皇室の

一分流であります。決して自分の家でもなく自分の身體でもありません。皆お國の家であり自分でもあります。然るに若し一家を守るべき家庭の主婦にして萬が一にもお國の重大事を覺らず、家を齎ふるの能力なく、目前の私利小事にのみ心を奪はるやうなことがあつたならば前線と銃後とは一致を缺き、これが爲め國家内憂の憂なしと斷ずることは出来なくなるのであります。されば大東亞戦を勝ち抜くために銃後一般國民の自勵自戒と共に婦人の修身齊家の自覺が極めて大切となつて來るのであります。

靜寛院宮様こそ婦人最高の御手本

國をおもふ道に二つはなかりけり

軍のにはに立つも立たぬも

たたくもおひしけらせよ教草

をとをみなの道をわかつて

右一首は異しも 明治天皇の御製であります。海によく銚後の

責務と婦人の進路とをお示しになつてをります。一億同胞の半数は女子であります。この女子には自ら女子の進むべき針路、執るべき責務が定つて居ります。随つて婦人の求むべき御手本も男子と自ら異つて居ることはこれ又申す迄もないことであります。わが二千六百年の國史中には優れたる女性はもとより數多くありますが、私の信ずる所によりますと、現時局下の日本婦人にとり最高最上の御手本は實に靜寛院宮様であらせらるゝのであります。

靜寛院宮の御略歴

靜寛院宮は幼名を和宮と稱し給へ、仁孝天皇の第八の皇女であらせられ、孝明天皇の御皇妹、明治天皇の御叔母君にあたらせらるゝのであります。幕末公武合體國論統一の爲めに御一身をお國の爲めに犠牲にして御年十六徳川十四代將軍家茂公の御家所として御降嫁遊ばしたのであります。

をしましな君と民とのためならば

身はむさしのうつゆと消ゆとも

このお歌は宮様が全身全靈をお國の御爲めに捧げ給ふた悲壯のお

歌として有名であります。宮様は一度徳川家に入らせらるるや「吾

れも徳川家の一人なるぞ」と思召し、堅く婦道を守らせ給へ、夫

君に貞、義母に孝、家僕に慈、一家の主婦として玲瓏満月の如き令

徳を備へさせ給ふたのであります。然るに御年二十一慶應二年七月

夫君に後れさせ給ふて早く寡婦の身とならせ給ふたのであります。

三つ瀬川世の櫛のなかりせば

君もろともにわたらましものを

空蟬のからをり衣なにかせむ

あやもにしきも君ありてこそ

世の中の憂きてう憂きを身一つに

とりあつめたるこちこそすれ

と御詠じになつたに徴しても如何に御悲嘆遊ばしたかゝわかるのであります。

宮様が寡婦の身とならせ給ふた翌年、慶應三年十月徳川家は太政を返上し、十二月皇政復古の大詔令御頒發となりましたが、惜しくもその翌明治元年正月鳥羽伏見の戦争が起り、これが爲め徳川氏は朝敵の汚名を蒙り、官軍の御征伐を受けねばならぬこととなつたのであります。これに對し十五代將軍慶喜は専ら謹慎恭順の意を表すると共に只管家名の相續を請ひ奉らんとし、各方面より謝罪歎願の使を出したのであります。が、皆途中で官軍に喰ひ止められて空し

く歸つてしまいました。然るに不思議にも宮様の御使士御門藤のみが無事に着京して徳川方の實意を朝廷内に貫徹することが出来、これが唯一の手懸りとなりまして、江戸には東西兩軍の衝突おこらず無血開城となりました。

そも／＼江戸の開城は歴史的に見てその意義極めて重大なるものでありまして、若しこれが東西力を竭くして戦かつたならば江戸は兵燹の巷となつた計りでなく、何時迄この戦争が續いたかも知れませぬ。かくして居る間に英佛の外國干渉が始まつて日本はどうなつたかも知れませぬ。然るに幸にも江戸城内に婦道の權化とも申上げべき宮様がおいでになり、深く事態の重大なるを憂ひ、親ら書を裁して「何卒私への御憐愍と思し召され、汚名を雪、家名相立候様、私身に代へ願上參らせ候。是非官軍差向られ、御取つぶし相成候は、私事も當家滅亡を見つゝながら居候も残念に候。まゝ急度覺悟致し候所存に候」と義を説き情を伸べ死を以て自家の救命を御歎願遊ばしたお蔭で明治元年四月江戸は無事開城となつて維新の宏談こゝに成り、徳川氏は家名相續を許され、江戸は改まつて帝都東京となるやうになつたのであります。

宮様は貞烈淑正の御婦徳に兼ねるに英明の資を具へさせ給ひ、常に天下の大勢に着眼し國體に添徹し、大義名分に些しも惑ふ所あらせられなかつたのであります。一言にして盡くせば國體に基き萬事

國家本位に終始遊ばしたことは今日時局下婦人の大に學び奉らねばならぬ所と存じます。宮様は平生神佛の御信仰極めて厚く、晩年麻布御殿に御隠棲専ら夫君家茂公の御菩提を弔らはせ給ふたのであります。その簡素なる御生活は洵に感激の至りでありました。明治十年九月二日宮様は脚氣の御病にて三十二歳を一期として崇高窮りなき御一生を終らせ給ふたのであります。

七十年令忌と大東亞戰

來る昭和廿一年九月二日は宮様の七十年令忌に相當するのであります。今や大東亞戰の超非常時局にあたり宮様の七十年令忌を遡へ奉ることはそこに深々なる意義を痛感せずには居られないのであります。惟ふに明治維新の大業は國內的には七百年來の武家の政治を覆滅して肇國の天業に還元し對外的には嚴たる列國對峙の基礎を確立したものであります。こゝに新日本躍進の氣運は脈々として發揮されたものであります。隨つて今日の「東亞の盟主」「世界的日本」もこの維新御大業の當然の發展と觀て差支へないのであります。私の特に感を深ふすることは、幕末維新にかけての強大なる外敵が今日と同様米英であつたことであります。米はペルリやハリスを遣はして日本に屈辱的開港を止むなくせしめ、剩さへ琉球に米國旗を掲げたりしたことがあります。英は長崎に不法闖入して幕吏を

憤死せしめたり、生麥事件を惹起したり、薩英戦争を起したりその他いろ／＼と不敬を致して居ります。これらのことは幕末外交史を觀れば極めて明瞭なることであります。當時日本國內の叫聲は尊王攘夷の四文字に盡くされて居りました。翻つて今日は如何でありますや。舞臺こそ全東亞に擴大されたものではあります但其の正面の大敵は米英であります。これを撃滅すべき日本刀は尊王の大義心に外ならないのであります。

靜寛院宮様は幕末維新にかけて日本第一の婦人の典型であらせられまして、永劫に亘り非常時日本の婦人の纏ふべき針路と實踐とを完全に體現しておいで遊ばすのであります。幕末維新の難局も時代に目ざめ、國體に徹し、婦道に精進遊ばした一御女性によりて内面的に打開され突破されたことは眞に驚嘆すべきものがあります。從來歴史に顯はれた婦人にはもとより立派な人もありますが、多くは一藩主に忠であつたとか、主人を勵ましたとか、簡義節儉を教へたとか兎角小節私事に拘はることが多かつたのであります。しかし

質素な正則の妻

福田正則は尾張の人で、はじめは秀吉に仕へ、のちに家康に仕へて戦功が多かつた。正則の夫人は津田雲衛門のむすめで内助の功顯著なるものがあり、當時すぐれた賢夫人であつた。

つた。正則が十九萬石清須の城にゐた時などは、その夫人はいつも普通の着物をきてゐることが殆んどなく、大抵は正則の着古したものが小布を集めて綴り合せて衣服としてゐた。このやうに常に質素第一に暮しをしてゐ

今日の婦人は世界的國家的で大局に目のあいたものでなければならませぬ。私が宮様を日本稀有の婦人の御手本と奉獻申上げるのは、宮様が常に國家本位に立脚し、その立場より婦道に邁進遊ばし、纖手よく國を救ひ、家を救ひ、市民をも救ひ給ふた崇高雄大なる御精神と御手腕とに景仰の念やみ難き點に存するのであります。宮様の御肉身は七十年前におなくなりになつて居りますが、その御魂は斷へず護國の女神、救世の菩薩として吾々の頭上に輝いておいでになるのであります。吾々婦人は常に日本國民として天皇に歸一し奉り、その實務の實行は一に範を宮様の芳躰に倣ひ奉らねばならぬと信じます。申す迄もなく婦人も天皇陛下の赤子であり、國家の大御寶であります。女子なればとて決して自己を侮つてはなりません。銃後に火の如く燃ゆる愛國心とハチ切れるやうな元氣と、烈々たる婦道とがなければ決してこの大難局を乗り切ることは出来ませぬ。今こそ「和宮精神」換言すれば國家中心の婦道を銘々に體現し、一人一人が國に捧げ、家を守らねばならぬ秋であります。

たが、たまたま關ヶ原の戦ひが始まつた時に清須の城が最も準備が出来てゐたといはれる。即ち兵具は勿論のこと乾飯の如き兵糧があり餘る程備へてあり、駿馬の多かつたことを他を壓してゐたといふことである。

カ マ ル タ 乗 っ て



保 井 永 文

○
我々が比島へ派遣されて宿舎にあてられた
ところは、カトリックの學校であるアテネオ
大學の校庭に面した、ダクタストリートにあ
つた。

朝早く窓ごしに快よい讚美歌の混聲合唱が
深い眠りをよびさましてくれる頃は、
三々五々職場を指してゆく労働者達と、新
聞を賣歩く「トリビュン」と云ふ朝もやを
突とほす様な小供の聲と、

シャンシャンと鈴をつけた馬車、カルマタ
の轍の音が聞えマニラの朝が明けてゆくので
ある。

我々のマニラへ入つた頃は、未だバタアン
の總攻撃前で、はるかに鈍い砲聲の聞えて來
る頃であつたので人通りも少ないものであつ
たが、

いよ／＼バタアンも・皇軍の手によつて陥
ちコレヒドールも陥ちて米比軍の全面降伏と
なつてから、

マニラの街々は、いちどきに生色をとりも
どした。わずかではあるが地方に騒動を續け
る敗殘兵等と、マニラへのがれて來る地方人
が増え、今では非常な賑はひをていしてゐる。
戦前六十萬のこの都會が今では百萬を越え
ると云ふ位である。

このマニラ市街は殆んどアメリカ文化とス
ペイン文化とに依つて形成されてゐると云つ
て過言ではない位歐米化されてゐて、
殆んどヒリッピン的なものを見ることが出
來ない位であつた。

に着くといふ時私の乗てゐた馬がへたばつてしまつて道の真中に寝ころんでしまつた。こいつは弱つた早く起してもう少しなんだから頑張つてくれと云つても、馬は全く動こうとしない。

予馬の死から一娘



ずいぶん早くへたばる馬だな、と駈者に云ふと、いや今日はちよつと無理をしたんです。實は砂糖水を飲ませなかつたものですから、と残念さうにつぶやくのである。

ではこの馬は砂糖が好きなのか、と聞くと

この馬ばかりではな
い、カルマ
タの馬はみ
んな砂糖水
を飲むん
で、それが
いちばん大
切な馬にと
つての飲物
だ、と云ふ。
砂糖のふん
だんにある
所はやつば
り違ふわい
と、こつち

が感心してしまつたが、

このまじやあ汽車に乗おかれてしまふし
何とか出来ないか、と云ふと、

よござんす、私とその荷物をかついて行き
ませうと、

今度は駈者が馬より早くトランクを肩にか
ついでかけ出して行つた。

かへつてすまないことをした、
と、五〇センチターボ（五十錢）を手へ握ら
せると、

とんでもない、これは私の方がかへつて御
迷惑かけたんですから戴くわけにゆきませ
ん、

と五〇センチターボを私のポケットにねち込
んで帽子を取つてピコンと頭をさげ、サラマ
ネ（有難うございます）と云ふが早いか、ま
た馬の様な早さで自分の寝てゐる馬の方を指
してかけ出して行つた。

（筆者は 陸軍報道班員）

悟と生活、悟と往生

擔當 中村辨康
(質問 歡迎)

(問)

毎々御教示にあづかり有りがたう存じ上げます。左に就いて何卒御教へ

下さいまし。

一、佛教の悟は我々の現實生活と何う云ふ關係を有するものでせうか。生活上の何を指して居るものでせうか。

二、往生と悟との關係は如何でせうか。

法然上人の「一念に一度の往生をあておき給へる願なれば」の法語は結局「念毎に悟あり」と言ふやうに感じられますが間違ひでせうか。

(福井・坂井・新保・淨土子)

(答)

悟と云ふことは禪などが盛んに「大悟徹底」などと言ひ出したので、佛教の終局目的のやうに思ひ違ひをするやうに

なつたのですけれども、それに畢竟支那流の考へであつて、佛教本來のものではありません。佛教で求むるものは「悟」ではなく「覺」であります。覺に「おぼえる」「さとる」「さめる」「おもふ」「しる」などの意味があるので覺悟とつづけたところから、菩提の翻譯語たる「覺」を「さとる」の意味に取つて「悟」と云ふ換へ字を使ふやうになつたのではないかと存じます。それで覺路と云ふことを「悟道」とも云ふやうになつたのでせう。然し「覺」を「悟」の意味のやうに「さとる」と讀んではいけないのです。それでは固定したものになつてしまひます。つまり「さう取つたこと」がさとりであつて、そこにはそれ以上の進展がありません。そんなのは死んだものであつて生きて居りません。ですから本當は「さめる」とか「めざめる」とか讀むべきです。常に「活眼を開いてめざめ行く」ことこそ佛教

の無上菩提でなくてはならぬと思ひます。禪宗などが往々にして野狐禪に陥りやすいのもそこに弊害の根本原因があるからかも知れません。

この意味から云ふと無上覺こそは現實生活の諸問題の凡てに必要なものとなるわけでありまして、事毎に關係されて行かねばなりません。即ち事毎にめざめて行くのが正しい生き方だからであります。

次ぎに「往生」との關係ですが、阿彌陀經に依れば「阿彌多羅三藐三菩提」を退轉しないのが「往生」なのですから、如來に南無することに依つて往生を得るものとすれば、やがてその現實的な往生は念々の覺醒となるわけであります。故に「念毎の悟」ではなく「念毎の覺」となるものでありませう。

然し念佛信仰にはそんな穿鑿はいらないと思ひます。法然上人は「學生骨になるな。そ





淨土教本を求む

れでは往生をしそこなうぞ」と仰しやつて居ます。

(問)

日本國民として生を日本に受けたる其因縁に生き其因縁を活かすと云ふ事が吾々日本國民の使命であり信念でなければなりません。それは當一途に明治大帝の教育勅語を奉體し八紘爲宇の肇國精神の實現を期する事であります。現に第一線の將兵は生死を超越して其大理想實現に向つて邁進しつゝあるのであります。若し淨土教に於ける淨土の意味が現世をぬきにしたものではなく三世を貫く生活の内に成立つものとするれば、無量壽光佛に南無極樂に往生すると云ふことは日本國民としての因縁に南無し國體精神に歸一すると云ふことにもなるのであり此意味に於て淨土教は皇道教であると云つてもよく、また其處に淨土教の特色があるのでないかと思ひます。現時國民精神作興運動とし

て色々な行事が頻繁に催され宣言誓約また型の如く行はれてゐますが、要は國民の魂の問題信念の問題であつて、あらゆる道德行爲は信仰の理念の裏付けなくては徹底を期することが出来ないとい私は深く信するのであります。この故に宗教家の使命たる實に重大なりと思ふのであります。地方に於ける實際を見ますと法要のお勤め以外に殆んど實績の見るべきものがないのは實に遺憾であります。

是に就いて、私は現代の教育を受けた青年を對象としての最も簡明適切な教本(日常動行を含む)を欲しいと思ふのであります。教本の編纂は一本として種々な因襲のために急に望めないかも知れませぬが、鑽仰會としてならば出来ないことはないと思はれます。

(答)

御主旨は誠に御同感であります。教本の必要は私も最近特に痛感する一人ですが、中々よい本がありません。私は最近「法然上人の宗教」と云ふのを書いて居りますが、それは國體を中心として眺めたもので現代人に向くかと思つて居ります。また是非「産業青少年讀本」も書いて見たいと思つて居ります。宗教が生活から離れて「雲の上人」にのみ通用するのでは本當でないと思つて居りますからです。

(廣島市外 山口勇治)

此際先生方の御奮發を切に御願ひ致します。

念佛の稱へかたは？

(問)

私は南無阿彌陀佛と申さねば本願招換の聲に應じられませぬ。然るに本職の坊さんは「なむあみだぶ」とやつてゐます。云ひ安ければ「お母さん」よりも裏店の「おつかあ」の方が良いと同じです。三昧に入り安いためなどといふのでは信仰ではありません。入定の方便であると思ひます。徹底的是正が必要と思ひます。

(東京・城南・不待來迎寺)

(答)

一休禪師に鎌川新左衛門が、念佛の唱へ方の具略に就いて質ねたと云ふ話を御存じですか。また徳本上人が「六字分明に唱へなければ如来の御體を不具になし奉ることになる」と言はれたこととその話を對比して見て、どちらも一面の眞理を示す



ものと思ひますし、具略共に決して不都合ではないと思ひます。要はこちらの信が金札か

鐵札かに依つて決せらるべき問題でありまして、具略の形式に就てのみ論ずべきものではありません。若し形式を論ずるならば「南無阿彌陀佛陀耶」と稱へなくては佛體不具となります。南無阿彌陀佛だけでは不完全であります。従つてこれは形式論ではありません。ですから「お母さん」と「おつかあ」との比較ではないのです。それで「あかあさま」の方が尙ほよいし「おはうへ」の方がもつとよいことになります。さう云ふ形式の問題ではないでせう。若し裏店で鼻たれ小僧が母親の前に手をつかへて「おんはうへさまよ」と云つたら恐らくその母親はふき出してしまつて「馬鹿におしでないよ」と云ふかも知れません。本職の坊さん云々の御言葉ですが、念佛の信に就いては本職も非本職もあり

ません。大日比の方へ参りますと、坊さんはじめ皆な「なむあみだぶつ」と云つて決して「なむあみだぶ」とは唱へません。

次に三昧に入り易いために「なむあみだぶ」と唱へるとありますが、それは何かお考へそこないではありませんか。恐らく光明會の中のかつての或一部の人々のことを見られたか聞かれたかなさつたのでせうが、光明會でもそれはむしろ「邪道」の方に屬するものであります。御説の通り絶対に念佛を方便に使用してはならないのです。若しさうならば無論是正の必要があります。御協力下さい。

墓石 揮毫のお取次

お望みの書體にて標札、墓石、石碑等その他何んな種類の揮毫でもお取次いたします。筆者はすでに定評のある小橋麟瑞師が擔當し、多大の好評を拍してゐます。詳細は返信料同封の上で「法然上人續仰會揮毫取次部」に御問合せ下さい。



聖典
講義

歎佛偈講義……10……

國家に供養する

大野 法 道

がよい」といふことになるであらう。

ところがこの意味を、「佛様には御供養せずとも、道に生
きればよい」と取つたら、それは飛んでもない大間違ひで
ある。これは徹底していふと、「道に生きてこそ本當の御供
養になる」といふことである。さうなつてくると、

供養には種々の仕方があることを知らねばならぬ。

供養は大體三通りに分けてみることができる。第一は普
通に言ふ供養で、香を焚き燈明を上げ、蠟燭を點し花を立
て、飯食茶湯を獻することである。之は形のある物を以て
する供養であるが、第二は心を清め、合掌して念佛した
り、お經を讀んだりすることである。これは心を佛に通は
せて、行事をつとめるのであるから、前の形ある物をさ

たとひ佛ありて百千億萬無量にして
大聖の數、恒沙の如くならんに
一切のこれらの諸佛を供養せんより
道を求めて堅正にして卻かざるには如かず

これは第十一・十二偈である。前の八・九・十の三偈に
は、佛格の成就を願ひ求めて、佛に通ずる道を行くことを
述べたから、次にさうした願求を以て道を行くのは、何よ
りも尊いことであるといふ自信が述べられるのである。

此二偈を縮めてみれば、「多くの佛様（先祖のみ靈をも含
めて）に御供養するよりも、自分が道を求めて生きぬく方

けるのよりは違つた供養である。しかし此二つの供養は離れたものではなく、佛を信じ崇める心が形に顯はれて物を供へるのであり、またその上に行事をつとめるのである。

第三の供養は我々の日常のあらゆる生活に於て、正しく張り切つて道を歩むことで、生活そのまゝが供養になるのである。しかも此人間の生活が、佛への何よりの供養であることを、阿彌陀佛の前身たる法藏菩薩が、多くの佛様に供養物をさし上げるよりも、自身が道に生きぬく方がよい」と言はれるのである。何故に人間の生活が、佛への何よりの供養になるのであらう。

こゝで、供養とは一體何ういふことなのか、を考へる必要がある。

二

凡そ生きてゐるものは、何物に限らず、すべて養ひなしに生きられない。人間は勿論のこと、動物でも植物でも、場合によつては石のやうな鉱物でさへも、自分が生きて大きくなつてゆくには、必ず養ひを攝る。人が佛を信すれば、佛はその心の中に生きてゐるのであるから、自然に供養物をさし上げたくなる。

つまり、佛の養ひとなるものを上げて、わが心に佛を生かすわけである。

確かに種々の供養の物をあげるのは、佛の養ひになるに違ひない。邪念のなくなる香の薫り、明るい光の燈籠や蠟燭、美しく咲いてゐる花であり、わが生命を支ふる飯食茶湯であるから、これらの物を佛に供へることによつて、佛はそれを養ひとして、はつきりと心に映り出られるのである。

第二の供養の、心を清めて合掌し、念佛したりお經を讀んだりすることは、佛の説かれた行事であるから、之が佛の養ひになることは言ふまでもない。これらの行事によつて物を上げた已上に、佛の力を感じることができるのはその爲めである。

假りに供養は以上の二種しか無いものとして、その供養をしながら、若し日常の生活が正しい道を張り切つて踏んでゐなかつたら、それは一方に、佛の養ひとなるものを上げながら、他方に佛の心を傷けてゐるのである。

佛は人の供養によつて、初めて生きるのではない。自ら進んで大慈悲心に燃えて、衆生を救ふ事業にいそしみ、人が正しい道を張り切つて行く事實を何よりの樂みとし、

それを養ひとして生きて居られるのであるから、その佛の本心に一致する生活こそ、最も強く佛の生きられる力の養ひになるものであらねばならぬ。これが第三の生活供養の意である。

三

以上は三通りの供養について話したが、法蔵菩薩の言葉に「供養物をさへげるよりも、自身が道に生きぬく方がよい」とあるのは、普通に供養と言へば第一の物の供養か第二の行事供養だけだと思ふ人が多いから、第三の生活供養の大切なことを、はつきりさせる爲めであると信ずる。故に之は決して供養物をさへげずとも、行事をせずともよいといふのではなく、それらの供養をするともに、肝心の生活を怠つてはならぬと思ふ。

しかし、よく考へてみると、生活供養の中に物の供養も、行事のそれも皆入つてゐる。いづれも生活の外のものではないからである。

もし、佛壇の花が枯れてゐたり、自分達だけご飯をたべて、佛様に供へることをせず、お線香の煙の上ることがないとしたら、それで、正しい道を張り切つてゐると言へる

であらうか、を考へたら判るであらう。また物や行事の供養から、生活供養が導き出されてくる。

前にも述べたやうに、物の供養をさへげるのは、物を通して心に佛を生かすのであり、諸の行事は心を清めて佛力を感じ受する道であるから、これらに基いて日々の生活が繰りひろげられてゆくことになる。行事は生活の基本となるものである。法然上人がその生涯を貫いて、専ら念佛を説かれたのは、かうした生活の根となるものを植え付けん爲めであつた。故に上人の言葉に、

たとひ餘事を營むとも、念佛を申し申し之をすと思ひをなせ。餘事をしつゝ念佛するとは思ふべからず。

といふがある。

日本人の日々の生活は、皇恩報答の根本に立ち、早朝神佛を禮拜することから始められる。この行事の中に一日の生活を形造る活力は満ちてゐる。

ところが二三年前からだと思ふがラジオは毎朝八時頃になると頻りに音楽を放送する。この戦時下に朝つばらから音楽でもあるまいと、そのわけを誰れ彼れに訊いてみたところ、
「あれは勤め人が出かける時、または仕事に取り

かゝる人の心を朗らかにし、生活の進歩に勢ひを付ける爲めだ」と言ふた人がある。もしさうだとしたら、暑い時に團扇であふいで貰ふやうな感觸と、心に貯へる信念との勢ひを與へる力の相異について、考へたいものである。

四

國家も生きてゐるからには養ひなしには濟まない。日本には天壤無窮の皇運と一體の、極まりなく進みゆくところの、無比の國體を具へた國家である已上、その養ひはそれに相應すべきであるから、國民が全生を擧げて、之に供養すべきは當然である。

その供養は亦前に述べたやうに三通りのものがある。

第一に物の供養とは増産である。この大戦下にあつては物資は不足し、食糧は逼迫するから、特に軍用關係や食料は缺乏に至らしめぬやう、力一杯に精進して、それらの生産の増進につとめねばならない。その生産の中で、新たに物を産み出すこと——製造、加工、農耕、漁獵、採掘、伐採などに従事して居られる人達には、お國に供養する物を作る光榮の喜びを感得されるやう念願したい。

この喜びには仕事に對し、尊い自覺が籠つてゐるから、

能率はいよ／＼上るであらうし、生産された物には粗末な姿がなくなつて、立派に國家の養ひとなる物が出来るから、生産者の功德は極めて甚大である。もし製作する心の中に私心が挟まれると、すべてうまくゆかぬことゝなるであらう。

新らしく生産する物だけが國家への供養になるのではない。今ある物で、苟くも國家の生きる力になるものは、皆供養物としての徳を具へてゐるのであるから、それを空しく退藏し死藏して置くことは勿體ない。

ましてそれが秘藏されるやうなことがあれば、その物は自ら具ふる供養の徳の無視されるのを心外に思つてゐるであらう。

第二の行事供養は國民的の行事で、大戦下であるだけに多くなつて來た。

國民儀禮から鍊成、國體や町會や隣組の行事など、何れも國家への供養である。之は一億國民の息を揃えるために最も大切なことである。息のそろつた國民をもつ國家ほど強力なものはないから、行事は立派にお國の供養になる。

また此行事は國民の生活を導きだす基本となるに於て、極めて重要な意義をもつものである。

ある一外人の感想として次のやうなことが新聞に載つてゐた。

「或る婦人團體で、毎月一回お宮参りをしてゐる。その會員が平常の日は、お宮の前を知らぬ顔で通り過ぎてゐる。

戦時生活意識の使ひ分けをやつてゐる。こんな例は他にもありはしないか。」と言ふのである。

行事と生活が離れてゐるやうなことで、本當の行事の意味はなく、國家への供養となる力も薄弱であるであらうから、行事は精神こめて、日常生活に密着させるのが本當である。

第三には國民の日常の生活が、そのまゝ國家への生活供養である。

大戦下にあつては殊に力強く、「正道を求めて堅正にして卻かざる」生活こそ、國家への供養の大なるものであらねばならぬ。

それに引きかへ、永らく自由な生活に馴れてゐる爲めに、戦争體制に出遇つて窮屈に追ひかけられ、それを追つ拂ことに舞ひ暮れてゐるやうな生活、正道を求めずして邪道に履み込み悪を惡とも思はぬ生活であつたなら、それは國家の爲め何の養ひにもならぬばかりか、反つてそのため

に追つ拂はんとする窮屈がますます強くなり、邪道の深みへ落ちて行くより外に、ゆく處はないであらう。

窮屈を追ひのけようとして、しかも自ら窮屈を作りだすのは、買ひ漁り、買ひ溜め、情實賣りである。これらの爲めに物が有る所だけに固まるから、回轉すべき筈のものがそれだけ減り、世の中はいよいよ窮屈になるばかりである。

悪いことを大して悪いと思はず、悪いと知りながら止められず、邪道の深みへ落ちてゆくのは闇である。闇は無法なる高價を喜ぶ貪欲と、苦とせぬ愚昧の骨頂であり、良民を苦しませ、戦争生活の正道に泥を塗り、國家の戦力を傷ける大邪道である。

これらの正道を履みはづすやうな生活は、つまり、生活が國家への供養なるを知覺せぬ所から發生する。その根となつてゐるものは個人的の自我主義である。

一身をさへ上げて國家に供養する出征將士の生活に、感激の極を盡し、そこに日本人の眞姿を見つめてゐる同胞の中に、闇の邪道が絶えないのは全く耻かしい限りであり、不思議でもあり不可解でもある。

歌壇

岩野喜久代選



東京市 上野 昌子

征夫が文とだへしままにみんまに
に戦果あがりぬ如何にるまむ
評 遠くわが夫は征戦に従つてゐる。妻は一日としてその武運を祈らぬ日はない、消息あれば喜び、消息絶えれば胸を蕩かす。しばらく消息が絶えたので、或はと案じ暮してゐる中に夫のゐる南方の大戦果が發表された。その大戦果をあげた中に夫も力闘奮戦したに相違ない。早く委しめられたい。元氣であるにしても又さうでないにしても。

名古屋 鷺津 耕順

刀振ひまつさきかけしその腕を撃
たれし友の左かきの書

評 戦地の友人からおぼつかない左書きの手紙が来た。様子を聞けば、戦闘でまつ先きに指揮刀をふるつて進んだためふり上げた右手を弾に打ちぬかれてペンがとれないのだとのこと。友人の勇猛を心で讃嘆した歌である。

評 北海道 中村 もん
入港の汽笛す北の大寒の塙頭に朝の作業違し
評 北海の極寒の季節にも、港は戦時物資輸送の重任を負ふ汽船の出入が繁い。汽笛が鳴ると、港の勤勞者達は、大寒を物ともせず沖に出動する。その活氣に溢れた風景に作者は感動した。

兵庫縣 佐野 常人

かげ膳を据ゑて快癒を祈るそと母の文きぬ讀みて泣かるる

東京市 清水 富

新米を炊しぎて盛ればゆたかなり
尊き汗の一粒一粒

大阪 秋田 嘉朗

大みことかしこみまつり吾はただ
御旗の下に死ねるうれしさ

東京市 小山 しづ

ふるさとや近き千曲の水枯れて飯
綱山の峯しろきかな

長野縣 丸山 力園

落葉やく煙一筋立ちのぼり輝く空
のいや高きかな

満洲國 鶴岡 慈禮

氷點下三十度なる風に堪へ忍べど
双手荒れにけるかも

宿 營

愛知縣 戸松 勝美

着ぶくれて風呂焚く男の子二人あ
て火に映ゆる顔いと似たるかな

北海道 道鎮 茂靖

一億の情に生きしこのからだこの
からだでも職場まもらむ

兵庫縣 昌中 好

みいくさは六年となりぬみ光を浴
びて淡路に我は身を醫す

秋田 小崎 蓮葉

あめのした民まもらせと大君は皇
祖の神に祈らせ給ふ

京都 重松 保

祈るらく八百萬神み軍を勝たしめ
給へソロモシ海に

兵庫縣 山本多可子

神前につどひて祈るをみならは御
國を思ふ心ひとつに

岩手縣 中村 てつ

楚鐘のこれが最後の音ぞと聞き國
難思ひ涙なるる

青森縣 平岡 一宏

雪積る社の前にぬかづきて祈るみ
國の母は強かり

京都 葉山 千高

國のためたふれし雲乞ひ降し祀
る齋場に霜ぞきびしき

東京 小柳 萬

みんなみの兵の作れる茄子の畑
「早く實がなれ」かく札の立つ

京都 福島孝治郎

霜ふかき麥生踏みつかの農女何
思ふらん暫し佇立す

北海道 前野 賢一

みいくさに病みて三年のわれなれ
ど人の情に今日も生きぬく

北海道 花田 順往

みいくさの勝ちぬく毎に思ひやれ
尊き犠牲ありやなしやと

熊本 五野 一三

勝ちいくさはこるべからず銅像の
尊徳翁も召さるる秋ぞ

兵庫縣 前川 泰三

歸 還
佛壇の燈のゆらめけば經を讀む母
の後に掌を合せけり

投稿規定

はがきに一同二首以内
と係あつて住所氏名明記
の上送ること



信仰の花開く

市橋善之助

たのしい社會、たのしい家

私は此の數年前、法然上人の「一枚起請文」を拜見してから、すっかり上人のお弟子になつたつもりで居るものであるが、法然上人のお弟子になつてから、私の心の上に不思議なことがおこつた。どういふことかといふと、私は随分理窟つぽいたちであつたが、上人のお弟子になつてから、上人のおつしやつたことばなどを拜見して、自分の考と違ふことがあれば、これは自分の考が間違ひだとおもつて、自分の考をかなづちでぶつて打ち直さうとおもふやうになつたことである。かういふ心境は、皆さんはどうお考か知ら

んが、實は、楽しいものである！
決して苦しい、わざとらしい氣持ではないのである。

佐藤春夫さんが、此の雜誌の正月號で、ひとへに彌陀の本願を信じて疑はぬのは、皇室をどこまでも信仰して居る日本國民の性情にふさはしい教であるといつていらつしやるが、かうして自分の信じる、此の世の中の先生、法然上人のやうな方を信じ切つてしまふ心持は、とりも直さず、細君が主人に、子供が親に、また學校の先生に對する氣持のお手本だと私はおもつて居るがどうであらうか。
日本の社會、日本の家は、外國の社會、外國の家とおなじやうであつてはならないので

ある。上のものを心から尊敬する、それゆゑにたのしい社會であり、家でなければならぬとい私はおもつて居る。

信仰の花開く

私はたゞ今、上人の「一枚起請文」を拜見してから、上人のお弟子になつたといつたがそれは「一枚起請文」に、人をお弟子にならせる力はある。併し私は「一枚起請文」を拜見してからお弟子になつたに違ひはないが、私をしてあの起請文を拜見してお弟子にならせる下地がなかつたわけではない。即ち、あの起請文はたしかに私の信仰の花を開かせた。併し私の信仰の花を開かせる春雨が降らなかつたわけではなかつた。何をかくさう、私は名古屋の、淨土宗を宗旨とする家に生まれた。特別宗教に熱心な家で、私の周囲には念佛の雨が絶えず降りしきつて居たのであつた。私は子供心に死ぬ時には南無阿彌陀佛をいふものだともつて居た。年四十いくつになつて、世の中がこゝろもとなくなり、道を

求めるやうになつて、心に浮んだのが淨土宗のお教なのである。南無阿彌陀佛々々。念佛の功德は、私は小さい時から知らず識らずのうちに知つて居たのであつた。あの結構な起請文を拜見して、たゞちに上人のお弟子にならうとおもつたのも、當然のことなのである。だからお子さんのあるお家の方々に申し上げたい。今あなた方がお念佛をなさる。それをお子さんがお聞きになる。何にもならないとお思ひになつたら間違ひである。皇室の有難さを知らない子供が日本にない如く、念佛の聲しきりなるお家のお子さんは、必ずや知らず識らずの内に念佛の功德は御存知になるのである。

お子さんのためにも怠りなく念佛の行に勵まれるがよろしい！

私は實は子供はどういふ風に教育したらいいかといふやうなことを書いた本を世間の方に御覽に入れて居るものであるが、皇室の有難さと、念佛の靈妙不思議なことを教へさへすれば、私は私の子供は、ほかのことはほつ

たらかして居られるものである。

お經には念佛といふものは何につけてもきく藥だと書いてある。

子供の教育につけてきかない筈はなからう不良少年だつて念佛をとなへることを覚えさへすれば不良少年ではなくなるだらう。何故ならその時佛は彼等の心の戸をおたゞきになるのだから。

そしてそれには周圍のものが念佛を怠らぬ生活をおくつて、知らず識らずの内に子供達に聞かせさへすればいいのである。

淨土宗の有難さ

御専門の方がいらつしやる此の雜誌に、在家の私などが淨土宗のお教のことを書くのは氣がひけるが、私は法然上人のお教は、簡単だから有難いのである。南無阿彌陀佛ととなへさへすればどんな人間でも救はれる。さういふ風に簡單で、誰でも早速出来るお教であり、それで居て深い功德のあるお教だから、涙が出る程有難いのである。熊谷次郎直實が

昔 咄 集

危 い 落

さる人碁打つを見て居られたり。ただ物危い危いと申された。打つ者聞く、「何が危いぞ、おさへたら抜く、もし切らば渡らう。見な、石は續くが危いぞ」「いや端な石が落ちようかと思ふて危い」といふた。(寶永二年刊輕口あられ酒)

寒 山 拾 得

一人は寒山、一人は拾得とめい／＼に名をいふて出る狂言あり。然るを二人つれ立ちたる先の者、是は寒山拾得と申す者にて候」と名乗りしかば、次の者へはん事なかりしに「我等もそのつれにて候」(寛永五年刊醒睡笑)

ハ テ 不 思 議

盗人物をとりすまして人なき所に集り、そ

此の有難いお教を聞いて泣いたのも無理ではない。

そんなことが信じられるかといふ方があれば、私は申上げる。ほかの方はどうか知らぬ。私は信じて居る。まあ念佛の功を積んで御覽なさいと。

念佛の功德といふものはお經や御法語にも書いてある通り、靈妙なものであつて、理窟ではその靈妙さはわからないのである。念佛の功を積まなければわからないのであるが、といつてわかるのにむづかしい方法是要らない。たと念佛を信じて南無阿彌陀佛々々といひさへすればよいのだから。

もう一度いふと、念佛の功能は不思議なものと信じて、いや、それも信じなくつてもいいから、まづ念佛をとなへよ。何故なら念佛の功能も念佛をとなへることであつて来るのだから。で、念佛をとなへさへすれば、ただそれだけのことをしなへすれば救はれるといふのが上人のお教であり、だからこそ楽しい、有難い、誰にも早速出来、誰でも早速入

門出来る、即ち大きな、大衆的な佛門なのである。

此の誰にも出来る、簡単なお教であるところが、平たくいへば上人の御苦勞になつたところであり、御修行中の上人に現れた不思議な靈驗であり、淨土宗のお教の靈妙なところである。

私は日本國民は何も恐れるところはないとおもつて居る。此のお教がある以上は。此のお教を私達が堅持する以上は。此のお教は生死の大問題をも忽ちにして解決して居るお教なのだから。

かくて私達はやす／＼と一身を皇國のために投出すことも出来るのだから。

法然上人へ御紹介

もう少し書かせていたゞかう。

私は先程私の實家が佛事に熱心だつたことをお話したが、私の家の菩提寺には、前の知恩院の山下さんにも、増上寺のなくなつた増尾さんにも来ていたゞいてしば／＼一七日宛

れぞれに資材を分け取りにしけるが、唯今までありつる身のぐるむが見えぬ。異な事やといふ。一人面を振り／＼「あら不審や。誰もこの内に盗みさうなる者はないに」と。(寛永五年刊醒睡笑)

駿河の客

駿河より客人来る。どうぞ馳走に國をほめて喜ばさうと思ひ「あなた様のお國は結構なお國で、竹細工など見事にいたします。それは器用な細工、餘國には御座りませぬ」「イヤイヤ江戸の龜井町の方が上手で御座る」「どう仰せられても駿州は日本一のお國で御座ります」「なぜで御座る」「ハテ茄子を御覽じろ。一番早く御賞玩なされよう」「イヤ／＼本所の砂村が早う御座る」此の客兎角卑下するが辭。ハテどうぞ卑下させぬ譽めやうが有りさうなものだと、つく／＼とかんがへ、「おそれそれあなたが他國をお譽めなさるけれども、駿河の富士ときては餘國にならびなき名山で御座ります」「イエあれも半分は雪で

お説教の會を開いていたゞいたものだつた。殊に増上寺とは因縁が深く、増上寺は二度までも私の祖父の家へお立寄り下さつたのであつた。

祖父は増上寺のお齋りの時お車のかぢの前で、お訪ね下さつた有難さに泣いてかぢ棒にすがり、車夫がかぢを上げかねたのを私は今もはつきり覚えて居る。車の上で念佛をとなへていらつしやる増上寺、その前にしやがんで泣きながら増上寺の手を合せてをがんで居る祖父の姿……

話をはかるが、親鸞上人のおことばに、彌陀の御誓願も、何だか親鸞一人を救ふためにあるやうな氣がするといふのがあるが、實は私はあのおことばの意味がわからなかつた。今ぞ私はわかつたのであつた——私の菩提寺へは今申上げたやうに山下さん、増尾さんが御出でになり、増尾さんは二度までも私の家をお訪ね下さつた。私は山下さんからはお扇子までいたゞく光榮を有した。そのほか私は私の家で、私の菩提寺で、始終南無阿彌陀

佛の聲を聞き、佛説阿彌陀經讀誦の聲を聞いて居た。お墓詣にもしば／＼つれられて行つた。

私はおもふのである。

さうして知恩院、増上寺が私のそばへちか／＼とお姿をお現しになり、菩提寺の僧侶の方々がしば／＼お經をおよみ下さつたのも、みんな此の私を法然上人に御紹介下さるためだつたのだ。即ち私一人のためだつたのであつた。

さうおもふと私は因縁の不思議さに涙の湧くのを覺えるものである。

今日の時局だつてそうで、此の大東亞戦も日本の國の有難さを忘れ勝ちだつた、奢れる私達を教育する役に立つとおもへば、物資不足もかへつて有難くおもはれ、修行場へ行く時の如く勇んで楽しく時局にもむかひ得るのである。否、時局が苦しければ苦しい程楽しく、深く、熱い同胞愛を互ひに感じ得るのである！

御座る」(天明二年刊、富久喜多留)

しやつくりの妙藥

れつきとしたる侍、住吉へ參詣せらるる道にて、フトしやつくり出て止まず、難儀なる折ふし、道ばたに寝てゐたる非人むくむくと起上り、「親の敵逃さぬ」とつめよれば、かの侍大きに驚き、「身共は人を討たる覺なし、かならずはやまるな」と申さるれば、非人いふやう「しやつくりがなをつたら一文下されませ」といふた。(寶曆元年刊、輕口浮瓢箪)

富士の裾野

若い衆寄り、話の中へ六十許りの老父來りければ「ア、これ／＼、今時分昔の噂は耳に入らぬ」と云へば、「ア、そんならば歸りませう。」さてさて浮世はさま／＼ちや。兄は斬らるる、弟は縛らるる」「ア、もし／＼祖父さん、それはどこで／＼」「富士の裾野で」(安永八年刊、壽々葉羅井)

このとれ持

和田かつち

① ついでついで
つききつた古靴下



② ちよき
切つて



③ ちくちく
ぬつて



④ 二足が一足になつて
もどや
らはけ
る



⑤



⑥ 針が一本紛失
しました
よー



⑦ なんぢやネそう
針の一
本位



南の蚊

萩原賢次

○南國の蚊は
朝から夜まで
身邊を
おびやかす
群をなして、
團扇は専ら
蚊を近づけな
い爲の道具。



○晝間草原へ行く
と恐ろしく良い體
をした蚊がある、
内地の蚊とんぼほ
どもある。

こ奴は可成り厚い
毛の靴下の上から
でも平氣で刺すか
一ちたまらない。

ヒリッピン 奥さま

永井保



アタクシは皇軍
の勇戦振りには
共榮團の一員と
して何時も感謝



してゐます。そし
て最近ではアメ
リカナイズされ
たこの暑くるし
い髪の毛もぶつ
つり切つて化粧
もサツバりに





日蓮教義から質問する

三田富士吉氏に寄す

中村 辨 康

去る九月九日を第一信として

其後引續き淨土宗務所に管長宛の書面を寄せ、日蓮教義から見たる淨土教義への批判を述べてその是非の教を請ひ、且つ管長以外のものは「我見」があつて却つて害があるから、最高の管長格の御方の御答辯を願ひたいと、特に管長名宛に質問して居られるのであるが、それは誠に認識不足であり且つ増上慢の態度であるからその管長以外のものを對手とせずと言ふ傲慢さに對してさらに答辯の必要を認め

ないものと考へられる。

この管長以外のものの答辯は「我見」があつて害があるから聞く必要がないと云ふ一事は誠に失禮千萬で、この一事だけでも十分に答辯の價值がないのだが、更に質問書の回を重ねるに従つて段々馬脚をあらはし、信仰を求むるに名をかりて何か爲にせんとする氣配が覗はれるのである。求信者としてはものと謙虚な態度でなくてはならない。管長以外のものは正しくないとするならば、何の宗も大多

數のものがみな間違つて居ることになるのである。随つて何の宗も、教育機關や布教機關など

みな無駄ごとをやつて居ることになるのであるが、實に不適も甚だしきものと斷ずるより外に仕方がないのである。また大體に於て一宗の管長は一々直接に大勢の質問に答へられる役をおもちになつて居ないのである。だからこんな質問はむしろ層籠に葬り去られてもよいわけであるが、それは大きい御氣持から他人への參考にもな

るであらうとの見地から、特に雑誌「淨土」を通して返事をするやうにとのこととて、文を草し三田氏に寄することとした。

三田氏の第一問は無量壽經の第十八願の終りにある「五逆罪を犯せるものと正法を誹謗せるものとは往生し得るものから除外する」と云ふ文句を楯に取つて、無淨念王の話を引き、阿彌陀佛から五逆と誹謗正法とが捨てられたのを大臣の寶海梵志があらはれて「我作佛せば十方の淨土より撰出せられし衆生を度せん」と誓はれたのであるが、その寶海梵志は釋迦牟尼佛だから、五逆謗法の者は釋尊に依つてのみ救はれる筈であるのに、念佛の方で往生が出来る云ふのは何う云ふ譯か、愚凡の我々に納得の出来るやうに御教示願

ひたいと云ふのである。

第二問は佛法は一佛乘のみであつて二もなく三もない。そして法華經のみ眞實の一佛乘であつて多寶如來も之を證明し無量義經には四十餘年末顯眞實と説くのに、貴宗にては（茲に貴宗の文字を用ひて居る）命終の一念で淨土に往生すると云ふのは不審に堪へない。過去未來現在に於て十方世界中一佛乘のみとあるに、阿彌陀佛を言ふのは二佛となつてそれに合はなくなる。然れば阿彌陀佛は何れの世界の佛なりやと。

第三問は第二問を繰返して法華經等の文句を數句挙げた次に「前記の如く釋尊の法の中に於ては如此に候。然れば覺慧導緯善導法然等の往生成佛の金句は如何やうなる語句あ

りや」と言つて居る。

尙ほ此の外に二通ほど來て居るさうであるが、手許には三通だけである。あとの二通は見なくとも大概この範圍を出ないであらうことは察せられる。以上の三問といへども畢竟は同一な問題でしかない。要するに法華經のみが眞實で他は不眞實だとする建前を取つて質問して居るからである。

第一問は五逆罪と誹謗正法罪とは阿彌陀佛の本願から除かれて居り、且つ釋尊がその救済を引受けられて居る筈なのに、淨土宗ではその往生を認めるのは不都合であるらしく言つて居るが、さすがに經宗と言はれるだけあつて、一から十まで經典の

文句を盾に取つてその間から空氣銃の先を出して敵を攻撃しようとして居るのであるが、いづくぞ知らん。その盾は天台大師の「五時判教」と云ふ板造りのものだから昔流儀のヘロヘロ矢は止め得られても、近代的な大砲をぶつばなされたら一も二もなく吹き飛んでしまふであらう。

凡ての大乗經典は佛滅後五六百年代に般若思想が現はれてからのものであり、しかも北方系に屬するものである。根本佛敎若しくは原始佛敎たる小乘諸經典にしても佛敎そのまゝのものは一つもない。法句經や愛陀那のやうな最も原始のものと云はれるものでも佛敎そのまゝのものではないのである。かゝることはもう佛敎界の定説であつて

今ではそれを兎や角論するものはい人もないのであり、假に誰かが「大乘非佛敎」とは誠に怪しからぬ」と喰つてかゝつたとしても、日本國中の佛敎學者は（たとへ日蓮宗の學者でも）誰一人笑つて相手になるものはない。それほどまでに常識になつて居るのであるから、今さら五時の區別を信するものもあるまいが、それは歴史的事實としてではなく思想的展開として天台大師が五時に別けたまでのもので大師の獨創であり、そこに若干の無理があるけれども立敎の必要上止むを得なかつたのである。然るに後世の人々が五時を歴史的事實の如くに誤解してさう思ひ込んでしまつたのだから随分變なものとなつたのである。

大乘經は凡て方等經であつて「方等」とか「方廣」とか云ふのは「大乘」のことである。隨つて華嚴も般若も法華もみな方等經典であつて、華嚴經を最初に説き法華經涅槃經を最後に説いたと云ふ事實はないのである。それを立教開宗の便宜から方等經の中から華嚴、般若、法華の三部を抜き出して列べたのでその配列は史實ではないのである。

また無量義經にある「四十餘年未顯眞實」とは法華三部以外のものは「非眞實」であるとの意味ではない。今まで三乘を説いて聲聞としての行き方、緣覺としての行き方、菩薩としての行き方との三つの行き方があると言つたが、それは隨類説法でしかない。此の故に今はその三

乘を融合して一佛乘法即ち佛になる道を説き凡てをしてそれに歸入せしめようとしたのである

が、それが「未顯眞實」と云ふことである。無量義經の文をよく讀みもしないで、その一句だけを抜き出して自己主張の方へ引用しようとするところに大きな誤りがある。則ち以前には溝を説き小川を説き大河を説いたが今はそれらの歸入すべき大海を説くのであると言ふのであつて、その溝や川や大河が非眞實と云ふのではないのである。むしろ溝があり小川があり大河があつて初めて大海に歸入するところが出来るのであるから、それもまた重要な條件であるが、唯既に大海に来て居る「水」としては、何時までも溝を思ひ小川を慕ひ大河に軌着する必要はないのである。

いのである。それがすなはち「正捨方便」と言ふのである。

また釋尊の前生譚や阿彌陀佛の前生話は單なる傳説であり教育譚である。ジャータカ即ち本生説話なるものは幼兒教育の爲のものであるが、それが何時しか輪迴説をも生んだのである。

元來こんな前生話を重要視しようとするのは、その人の思想の根柢に「個在觀」があるからであつて、その考へこそ佛教でとことんまで排除せんとする「有」の思想である。前生譚はむしろ外に主要な目的があるのである。即ちその多くは「布施」とか「慈悲」とか言ふ心を養はんが爲のものである。隨つて信仰そのものにとつて「無諍念王」が何うしたの、寶海梵志

がかうしたのと穿索などは必要としないのである。

また貴氏は經文の文句を無暗に氣にして居るが、五逆のものが無量壽經の第十八願文に除外されて居るのに、淨土宗でそれをゆるすのはけしからんとして居られるやうだが、觀無量壽經には

或有衆生作不善業五逆十惡具諸不善如此愚人以惡業故墮惡道經歷多劫受苦無窮如此愚人臨命終時遇善知識種種安慰爲說妙法教命念佛(中略)稱佛名故於念中除八十億劫生死之罪(中略)如一念頃即得往生極樂世界(中略)觀世音大勢至以大悲音聲爲其廣說諸法實相除滅罪法聞已觀喜應時即發菩提之心と云つて居る。即ち此の人念佛

するが故に生死輪廻の罪がのぞかれたのであつて、もう五逆の罪人ではないのである。五逆罪が免除されなければ「應墮惡道経歴多劫受無窮」の咎であるのに、生死流轉の罪が解消された以上は、更に問題から除外された清淨の人となつたのである。梵網經には「懺悔すれば清淨なり」とあり、懺懺儀には「懺懺清淨の水を以て凡夫垢穢の身を洗ふ」とある。決して十八類文と矛盾はないのである。また次には第二問の「佛乘」のことであるが、之も亦問者の誤解に基くもので、之は「一乗」と云ふことであつて、聖德太子は「一大乗」と言はれて居るが前にも言つた通り「佛になる教」と云ふことであつて、佛が一人と云ふことではないのである。

る。然るに「天に二日なく國に二王なきが如く、一佛國に二佛あることなし」と云ふ日蓮宗獨特の語が先人主になつて居るものだから「佛乘」とはテツキリ釋迦一佛のことであると思ひ誤つたから、「佛乘の中には阿彌陀佛は認められない道理である」と間違つて考へたものではないかと思はれる。畢竟生半可の質問であつて正しく幼稚である。元來「成佛思想」は日本國家に適しない思想である。印度支那等の分裂國家には合ふかも知れないが、これは封建的なものであつて眞正なる國家意識を持つて居ないものである。ことに本佛思想から認め得られる「成佛」は完全な佛でなく國王の下に従屬する並大名的な佛ではないから、畢竟は未完成佛

であつて永劫に完全者にはなり得ないのである。

然れば淨土教では「往生」と云つて「成佛」とは言はないの

である。従つて貴氏の質問的をばづれて居るから、實は問題にならないのである。

陸海軍病院 慰問「淨土」

寄附者芳名

(敬稱略)

一圓五十錢	長崎縣佐世保市元町一	眞野 秀種
一圓五十錢	青森縣東津輕郡平館村福昌庵	丸尾 傳山
六圓	熊本縣八代郡八代町	盛光 寺
二圓	長崎縣北松浦郡星鹿村	香林 亮雄
一圓	青森縣北津輕郡武田村	葛西 永晃
三圓	高知縣須崎町中町	梅原 時江
一圓五十錢	堺市北花田口町一ノ一三	淨信 寺
一圓五十錢	愛知縣蒲郡町	松井 慶山
三十九錢	藤澤市鶴沼本眞寺	小林 清順
三圓	長野縣下水内郡常盤村	光明 寺
十圓	下關市西之端町二九	伊藤房次郎
二圓	芝區仲門前町三ノ三	松本 小枝
一圓五十錢	京都府龜岡町西岸寺	原 圓能

欲燒其筆硯

淨光會々員元代議士

小西和

私は祖先以來、傳統的に佛教信者であり、

その門徒であり、その歸依者であります。知

恩院に屬する讀較專修寺の檀家として、昔か

ら一家を擧げて淨土宗の教義を遵奉し、法然

上人の垂示を喝仰して居るもので御座いま

す。従つて私どもは幼少の折から、佛壇の前

に傾づいて参つたので、晨朝は兎も角、初夜

には両親に追隨して、お勤めを致すのが、缺

くべからざる日課でありました。

少年時代となつて中學の門に入り、その寄

宿舎生活を営むやうになると、信仰や誦經の

ことは、無意識の裡に忘却し去れるかの如く

なつたのもまた當時の實境に在つては、是非

ない次第と存じます。然るに青年の域に進み

た。

大學に入つてからは、學友の多數と共に基督教會堂に出入し始め、追々その信者といふ状態にまで立至りました。しかし之は主として英文學研究の場合、それと關係の深い基督教の聖書に通することが、必要である爲めから起つた譯で御座います。

隨つて大學の門を出て社會に立つや否や、

基督教の信仰は自ら雲消霧散し去り、何時しか

跡形もなくなつて來ました。其の反對に家庭

を持つと共に佛壇を迎へ、更に進んで佛教を

本眞劍に信仰する志が、油然として起つて参

りました。これは申すまでもなく、祖先以來の

傳統的信念と、幼年時代の潜在的意識とが、綜

合して迸發したものと思ひます。

爾來今に至るまで、眞に止むを得ざる場合の外、誦經や念佛を日課と致し、未だ嘗て怠つたことは御座いません。而も及ばずながら單に經文を音讀するのみならず、努めて其の意味を理解すべく、不斷に心掛けて居ます。

殊に先年増上寺に於て荆妻と共に、五重相傳

を受けさせて頂いてからは、念佛や禮拜の如

き日常の行事や、追善供養の如き隨時の勤行

が、一入大切と思ふやうに成つて参りました。

盲人騎瞎馬の亞流かも知れませんが、私は

小閑を得れば、直ちに經文を繙くのであります。

これは讀書百篇意自通とすれば、その間に

に幾分たりとも會得する所があらうとの、期

待からのことで御座います。而も經文の書き

方が美辭と麗句とに富んで居る爲め、文章を

綴る場合の參考資料として、眞に捨て難いも

のであることを感じます。就中、六時禮讃の

如きに至つては、特にその然るを覺へるので

古詩や律詩を賦する折などには、多大の教唆

を與へて呉れるではありませんか。

兎に角、無量無邊の佛法に就て、私は信心

を以て、

と研鑽との、いづれから考へても、自身が淺薄なものであり、理解に乏しいことであると竊かに慚慚たらざるを得ない氣がいたします。

それにしても五濁世の中に在つて、常に阿耨多羅三藐三菩提の心を、保つことに努めて居らねばならぬとは存じます。唯これを躬行するには、果して如何すれば善いかと申す點に就き、充分の信念を得ず、適切な方法をも、知ることが出来ないのを、誠に遺憾であり、不甲斐ない次第であると思ふて居ます。

然るに先般、増上寺内に開催の淨光會に出で、その席末に列して、計らずも郁芳大僧正猗下の御説教を拜聴して、叙上の疑惑を消散し得たやうな感かいたすので御座います。その御説教は特に長廣舌と申す程でもなかつたと存じます、また別に佛法の蘊善を傾けられた譯でもなかつたやうであります。たゞ南無阿彌陀佛に就て教示せられたに過ぎないに拘らず、私共に取つて燈明臺または指南車の如くに感ぜざるを得なかつたのは、御説教そのものが、簡にして要を得て居るからでもあります。

ませうけれども、主として猗下その人の徳譽の然らしめた所と信する次第で、誠に有がたいことゝ存じます。

私は先年、出雲の神門寺の本堂に於て、政談演説を試むる際、場所がらとて『一切衆生悉有佛性』の句を借用して、演題に供したことがあります。それは普通選挙の必要を説く爲めであつて、私はこれが實現に努むべく『假令身止、諸苦毒中、我行精進、忍終不懈』の心肝を以てすると結論したので御座います。當時かゝる結論を致したに就て、自ら其の可否如何を懸念して居たが、此たび猗下の御説教を承はつて、茲に始めて疑惑を解消し得たのは、欣幸に堪へざる次第で御座います。誠に淺薄な開陳で、汗顔の至りに堪へません。仍て左に拙作の漢詩を掲げて、擲筆することゝ致しませう。

淨光會

政客時々坐法堂、高僧微待結緣長。

焚香念佛就清饌、此會年來稱淨光。

呈郁芳大僧正

雲擁龕門、樹色新。歸依三寶、賽人頻。白毫聖者濟生德、華頂山頭聽法輪。

郁芳大僧正講筵

千戈滿地事紛爭、叙得綱常誰至誠。

講罷開窓看殿外、彩雲旭日一天明。

宿京都知恩院

老樹蕭條夜幾更、森々星氣射窓明。

地靈院古高僧在、華頂山頭念佛聲。

念彌陀

居常進退喜天和、飛雨流雲不厭多。

端坐清心香一炷、舉家朝暮念彌陀。

展墓

回鄉來詣臨塋前、一炷香華拜祖先。

風樹蒼蘚今尚昔、窮陰斜日轉凄然。

法然上人

讀破藏經卷五千、覺知念佛大機玄。

衆生濟度今猶昔、法焰煌々燭九天。

聽念佛聲

蕭々念佛草庵崇、隔戶孤燈映兩牕。

吾也居常千百劫、聽臻悲願感無窮。

俳壇



太田耳動子

北海道 柏谷 利吉

山陵を鎮めて雪のまどかなる

評 雪に蔽はれて淋しきまでに

静かなる山陵を見せられて

ある。引き入れられるやうだ。

取り立てゝいふ程の材料を用

へずに纏め上げた力を賞した

ある。句は斯くありたいものである。

廣 島 山口 勇治

前山に映えて首途の焚火かな

評 前山に映えての表現に

多少の誇張はあるが、其のた

めに反つて出征の首途の烈々

たるものを感ぜしめる。如何

にも大炎火らしい。

大 津 三木 蘇風

木枯に狐の聲も混りをり

評 「狐の聲」によつて木枯の

烈しき、寒さ、はかなさが強

調されてゐるところがよい。

名古屋 藤澤 秀國

小牧山時雨鳥のなくばかり

同 福田春泥子

白梅に日あしとゝかず暮れにけり

落椿再び猿の眠りけり

徳山市 田中 端

滋賀縣 重野ふみ子

本堂に時計を掛けて春を待つ

東京府 萩原 通孝

噴煙や枯桑の道ひとりなる

東京市 吉水青蓮子

寒月の鹽の水の美しき

愛媛傷療 折田双生

匪の姿見えゐる枯木横かな

東京市 清水金鈴子

除隊兵のたくましきものに厭され

たり

幸は新しき磨手にしたる

満洲國 鶴岡 慈禮

掌に冷えくかぞふ寂かな

名古屋 堀場 典雄

調髪の番まつ人や去年今年

京都市 戸田 悠誠

老僧は提灯もてり寒念佛

大阪市 萬 秋櫻

落椿再び猿の眠りけり

徳山市 田中 端

中秋の月に故郷の山河あり

京都市 福島孝治郎

初篝火浴びて消ゆるや詣人

富山市 新田 正治

輪飾りを結うて帆柱しきり鳴る

東京 山本 竹泉

記念樹の棚結びなほ河走かな

満洲三江省 神田儀一

陳原や橋一つあり河こほる

青森縣 丸尾 傳山

心から花鳥となりて春の山

京都市 稻岡 康雄

入營の挨拶に映え牡丹雪

同 當麻 信章

柑手に燈の音しぬ初詣

愛媛縣 中村 經明

霜の音あつめて雨戸くり開く

中 支 正木 桎逸

御十夜の物語り讀む閑ありぬ

小 樽 中村 茂舞

盆梅のつぼみちいさく寒の内

鳥山町 大輪 清

霜の陽のまぶしく鵲啼きにけり

北海道 長谷川初男

枯桑の一葉風に耐えてあり

平壤府 黒駒 進

本堂の餘りに廣き寒法會

東京市 坂口 康夫

冬枯の風飄々と田の面

同 原 しま子

元日や松は緑の色に良き

北海道 高嶋喜八郎

杉の木の上に小さく冬の月

富山縣 佐伯 禪祐

大根の青葉に照りて秋日和

大阪市 森本 清浩

山茶花の明かなるに掃きよりぬ

東京市 中村 善祐

はく息のしろしや母のよなべして

名古屋 伊藤 時雄

ひたすらに勝たんと念ひ初詣

浦和市 瀧川 信雄

戦の春にさがけ便りせん

越中高岡 内山禪芳

お降りや歸しともなき爐邊の友

富山縣 佐伯 光安

鐘の音のながめてたし軍の春

名古屋 山崎夏水子

營庭の誰もみずなり冬日かな

岩國市 長岡 白朝

冷やながら少しの酒や蕎麥をくふ

明石市 山本多可子

足袋つる指に霜夜はきびしくも

投稿規定

官製はがき一回二句以

内とし、住所氏名明記

の上「淨土」欄縦書き

確保あてに送ること

法語
解説

人間の宗教として

……法然上人法語抄(其十五)……

中村 辨 康

法語

ある人、問ふていはく、上人の御房の申させたまふ御念佛は、念々毎にほとけの御意にあひかなひ候らんとおぼへ候。智者にてましませば、くはしく名號の功德をも知らしめし、あきらかに本願のやうをも御意得あるがゆへに、と。

答へてのたまはく、汝、本願を信すること、未だしかりけり。彌陀如来の本願の名號は、木こり、草蒔り、菜摘み、水汲みの類の如きものの、内外ともにかけて一文不通なるが、となふれば必ず生れなんと信じて、眞實に欣樂して常に念佛まをすを最上の機とす。若し智慧をもて生死を離るべくば、源空なんぞ聖道門を捨てゝこの淨土門に趣くべき。まさに知るべし、聖道門の修業は智慧をきはめて生死を離れ、淨土門の修行は愚痴にかへりて極樂に生ると(和證燈錄第二の五諸人傳説の詞明義集) (法語抄六四、一六)

解説

法然上人へ色々質問して居る人が澤山あつたことは、念佛往生要義抄、要義問答、十二問答、十二箇條問答、一百四十五箇條問答、明遍問答、諸人傳説の詞(問答集)、東大寺十問答、往生淨土用心、念佛往生義等を初めとして二位禪尼(北條政子)、九條北政所、熊谷二郎、黒田上人、禪勝房其他の人々への御手紙などに依つて推量されますが、その中には此の問答のやうに念佛する人の資格が疑ひになつて居るものがない、澤山にあります。

なぜこんなに同じやうな質問があつたのでせう。これは皆な「存在觀念」に捉はれて居るからであり、随つて自力的な考へが抜け切らないからであります。

佛教の教は八萬四千の法門と云はれるやうに色々澤山ありますが、それは八萬四千と云ふ數ではなく、澤山な煩惱

があるのに對應するものでありまして決定的數量ではありません。しかもその煩惱なるものは「存在觀」が根柢になつて常に「自我」が主張されるところに生ずるものですから、實に八萬四千どころの騒ぎではなく無數に起るものでもあります。それでは話が出来ませんからそれをまとめ、見思の二惑とか六大煩惱とか更に段々廣げて百八煩惱乃至八萬四千の煩惱と云つたわけではありますが、毎日起る事件を毎日撓めて行くから八萬四千であり、その撓める方は聖道として同數の教があるとする譯でもありません。

ですからその根本は「存在思想」なのであります。然るにこの「存在思想」は一度破つたつもりでも事實は中々破れません。則ち物的存在觀を否定しますと、何時のまにか精神的存在が考へられつゝ更にそれをやぶると今度は色々小さいところに思ひがけない「存在觀」が事毎に見出され、反省すれば反省するほどいよいよ「存在觀」の破れ難いことを痛感するのであります。聖道門が六度萬行を修行し行くことを「自力」と稱するのは自分を中心として自分の完成を念願して行くからであります。既に「自力」と言つて居るところに、何處まで行つても破れ切れない「存在觀」があるのであります。無論「緣起」と云ふことに依つ

て一切は一切に關係して「自」の「自」とすべきものないことは判りますが、その出發點が「自」を基礎として居ります爲に何うしても残るものがあるのであります。それがまた根本無明とも言はれるものであります。

そこに至りますと念佛の教はおのが凡てを阿彌陀の大神命の中に委かせて行くのですから「自我存在觀」は問題外のものであるのであります。従來の固執が取り切れませんので、念佛して居る時には起りはしませんのに、念佛して居る時には起りはしませんのに、念佛して居ない時、概然念上の問題として「自我觀」が出て來て

「量の多い方がよいではなからうか」

「質のよい方がよいに相違あるまい」

などと、この兩様の考へが出て來るのであります。それで「量」の方は「一念多念の問題」となり、質の方は聖者對凡夫、定心對散心、持戒者對破戒者無戒者、智者對愚者、善人對惡人等の比較論となつて、つまらないところに疑惑を生ずることになるのであります。この問答の問者は「數量」の問題を解決して居るか何うかわかりませんが、念佛を唱へる人の「質」の良否に依つて念佛の價值に差等ありと見て居たのであります。即ち申す人の如何が問題に

なつて居るから「自力的」であり「功利的」であり随つて「存在観」から抜けることが出来ないで居るのであります。

名號や本願に對する理解が不必要だと云ふのはありませんが、その理解力を念佛の效果に結びつけて居るのは全く「念佛」を以て聖道門的の行と考へて居るからで、聖道的根性が殘存して居るものであります。念佛は「阿彌陀佛」に南無することでありましてその以外のものではありません。この「南無」の心境は全人的なものではありませんが、どちらかと云へば宗教感情が強く出て來たのでありますから、この宗教感情は畢竟智者でも愚者でも同一なものであつて、質や量で論ずることは出来ないであります。

一體優劣とか多少とかを定めてそれに價値の差等をつけるのは、ものごとを小さく取扱ふもので、言はゞ便宜主義から來て居る考へであります。然るに阿彌陀佛は全宇宙の全的生命力でありますから、そんな理解の優劣や唱へる數の多少で差等をつけられ得る筈はありませんのに、それをこちらの自分の問題として考へることは誠に冒瀆でありまして、誤れるもまた大なるものと云はねばなりません。

誠に御法語の示す通り「未だ本當に本願を信じて居ない」からであります。如來様の御名を呼ぶことが「念佛」

なのであります。例へば「おかあさま」と母親を呼ぶのに其の子の智愚等はちつとも問題にならないのであります。

それと同じことです。日本國民が「天皇陛下萬歲」と唱へて「南無天皇」の忠誠をいたすのに、貧富賢愚に依つて差等のあるべき筈がないのと同様であります。

天皇陛下に忠誠をいたすことは、職業の如何や學問の有無や財産の多少やで差等のある筈がなく、國運發展の上から言へば、上層の有閑階級よりも、木こり、草苅り、菜摘み、水汲みの業務にいそしむ人々の方がよほど忠誠なのであり、その職業を念佛の中に無我になつて働いて行く方が却つて「最上」としなければなりません。

念佛を唱ふことはこちらの力ではなくして、如來様に「南無」することに依つて「自己主張」をしない人になれるやうに、如來様の御力を頂くのでありますから、こちらに感じ得た氣持の吟味は許されても「念佛」そのものの優劣が論ぜられるわけはなく、如來の價値表現は常に何處にあつても均しいのであります。

「呼べば答へる」そこに他力の「信」があり「來迎」があり「往生」があるのであります。抽象的に價値などを考へる筋合のものではありません。そこには彌陀の力が全的

に答へて居て下さるのです。即ち如來の身口意の三業と、こちらの身口意の三業と「相捨離しない」親縁の縁生縁起がそこに現はれます。随つてこちらとしては、唯だ有り難く「欣樂」していよいよ如來様を慕しく思つて行けばよいのであります。ですから此處には概念はいらないのであります。

「欣樂すること」欣も樂も「ねがひ」でありますが、特に「喜び樂しむ」と言ふ氣持の含まれた「ねがひ」でありますから「願」と言ふ字を使用して居ないのであります。して見すればこの「欣樂」は感情としても一層強い感情と言はねばなりません。ですから「智」が中心になつて居ないことがよく判ります。

「智」は概念であります。概念では感情で執着して居る「存在感」を破ぶことは出来ません。イヤ人間は誰でも絶對的な「非存在觀」には立ち得ないのであります。

法然上人は一應「聖道門の修行は智慧をきはめて生死を離れる」と仰せられましたが、この智慧を極めることが大問題でありまして、實際には人間は誰でも智慧を極めることは出来ないであります。ですから釋尊を除いて此の地球上では成佛の自覺に立つた人は一人もなかつたのであります。

ます。されば何うしても淨土門に依るより外に道はないのです。但し「愚痴にかへる」と云つても、これは「馬鹿になる」と云ふ意味ではありません。智慧を振り廻さないこととあります。智の有無を問題の外に置くことであります。それはこの法語を味へばすぐ諒解されることと存じます。淨土の法門は理窟でなしに現實の事實に引きあてて考へて見る必要であります。

現實上のお母さんと呼ぶ氣持と阿彌陀佛の御名と呼ぶ氣持とを照らし合せて考へれば、そこに智慧は問題でなく「赤子に還つた」氣持が親子双方の間に極めて必要であり重要であり喜びであることが判るであります。また「天皇陛下萬歲」を叫ぶ兵隊の氣持には理窟も智慧も必要ではありません。それを「愚」^{アヘン}と云ふのです。大君に對し奉る國民の感情や或は母親を思ふ人々の氣持は直ぐ純な感情として誰にでも呼び起されますが、それと同様に、如來様への歸依渴仰の「南無」の氣持は信仰心に依つてのみ可能なのであります。法然上人は此の故に概念に陥り易い聖道門をすてゝ、直ぐ實際の忠孝の心に引き當てられ得る淨土門に歸することをすゝめられたのであります。この故に法然上人の宗教こそ本當の人間の宗教だと存じます。

編輯後記

◇皇軍の大勝果のかけには血のにじむやうな猛訓練がある。寒ければ耐寒行軍、雪が積れば雪中行軍を強行する。一月に月山學校で行つた奥日光での耐寒雪中行軍の如きはその一例であつた。

◇その時の講評の一部にスキー技術を普及向上させる必要を認めるといふことがあつた。そこで、われわれもスキー技術の演練をせねばならぬといふことになり、早速一部留守部隊を本部に残し、總勢七人で一月三十一日から三日間、越後湯澤のスキー鍛練場に出掛けを行つた。

◇教官は總務の道瀬君である。さして名人上手とまではゆかないがスキーを始めて十年以上になるといふ経歴にものを言はせ、スキーをはいて倒れない程度を訓練目標にするわれわれには最も適した師範であつた。

◇演習の結果は何事にも器用な庶務の池田君が抜群の成績で、僅か三日間で全制動廻轉までもにするとといふ長足の進歩振りを見せた。風邪で殆んど見學だつた會計の渡邊君を除けば一番無器用なのが小生で、立ちあがるとそばから轉倒し、仕舞には立ちあがらぬ内から轉んで来る始末であつた。

◇スキーといへば現地に征つてゐる會計の辻中尉殿を思ひ出す。昨年のスキー大會で、一等を三種類とか獨占し賞品の山を築いて部隊中の羨望の的になつたさうである。今年の大會には残念ながら週番司令で出場出來ず、皆から惜しがられたと自分で云つてゐた。

◇そして目下駐屯してゐる所は雪が少なく所々に草が出てゐるもので顔面制動をすれば一度で顔が變形してしまふ、と如何にも汝等には無理であると云はぬばかりであつた。とに角辻君は相變らず元氣一杯で軍務に精勵してゐる。

◇先日でも仕事上でも守るより攻める方が易い、大いに攻勢に轉じ給へと逆に現地から激勵してきた。

◇吉田絃二郎先生はますます以て御元氣にて何よりのこととお慶び申し上げます。

◇上司小劍先生は「私の部屋は陽がよく當るので助かります」といひながら火の氣のない寒い所で勉學に精進されてゐました。

◇市橋善之助氏は教育に關する個人雜誌「幸ひの子」を發行し、自ら主幹をつとめてゐられた念佛の篤信者です。

◇「淨土まんが」の責任者であつた山崎善一氏はこの程現地に征かれました。武運長久を祈ります。

◇永井和氏はやはり漫画協團の一員で軍宣傳班員として活躍し、この程比島から歸還したばかりの新人です。

(村瀬)

淨土 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年二月一日印刷納本
昭和十年三月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館

編輯兼 眞野正順

發行人 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區横町七 (東京一)
印刷所 大日本印刷株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九
配給元

日本出版配給株式會社
發行所 法然上人鎮仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢

(送料共)

一ケ年

腦の病・神經系統諸症・神經痛
腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

綜合的優秀藥

光明丸

主治效能

腦神經系統諸病、神經病、腦神經衰弱、不眠症、
てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺（ヒキ）、兒麻痺（ツケ）、腦
梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、（肩首コリ）
神經性（耳病）、神經性（鼻病）、記憶力減退、
思考力減退、精力減退、健忘症、性的神經病一
切、神經性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
胃腸障害、便秘症、神經痛、ロイマチス、關節
炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

藥價

六日分	貳圓
十日分	參圓
廿日分	五圓
卅日分	七圓

全國有名藥店・一流百貨店ニアリ
品切ノ節ハ直接本舖ヘ
御注文下サ

試供藥と
説明書を

進呈

謹製領藥元

願

成

閣

京都伏見いなり山

代理店

全國一流賣藥卸賣會社